

野口幽香の生涯

貝 出 寿 美 子

はじめに

およそ人間の生涯は如何なる生涯でも必ずその時代の言葉を一つ語っているものであり、それがどんな小さな生涯でもよく耳を傾けて聴けば、その言葉が聞えてくるものである。その人の歩んだ道が大きければ大きいだけいろいろの言葉がこたましてくる。

ここに紹介する野口幽香は、近代日本の黎明期における女子教育家として、また社会事業家として、スラム街の貧民救済事業に一生を貫き、道なき道に先鞭をつけ、上流階級の子等も、下層階級の子等も全くわけへだてなく愛し、教育したのである。そしてクリスチャンとしての貞節をかたく守り、歩み進んだ人である。その人柄の大きさ謙讓の美德は、彼女を知る人の語り伝えるところである。

我が国近代国家黎明期の背骨ある女性である。学習院をバックとして日本の上流階級との関係、日記、書簡をもとに、その資料の可能なかぎり使って紹介を兼ね、一、修学時代、二、壮年時代、三、晩年の三期に大別して記した。

あまりにも振幅ある人柄ゆえに、難解をきわめた。

目次

はじめに

一 修学時代

一、生いたち 二、幼年時代・小学時代 三、中学時代 四、東京遊学時代

二 壮年時代

一、幼児教育への道 お茶の水幼稚園・学習院幼稚園 二、二葉幼稚園設立 三、句作

三 晩年

一、宮中修養講話御進講 二、疎開 三、戦災孤児收容 四、逝去

むすび

系図

略年譜

一、修学時代

一 生いたち

微動だにしなかった石垣がゆるみ出したように、幕藩体制にようやく変革をせまる動きが高まってきた時代、一八四八年（天保十二年）八月十六日幽香（本名ゆか）の父野口野（旧名半蔵又は克復¹）は姫路の自邸（播磨国飾東郡姫路清水二九番屋敷）に生れた。父を嘉七郎母を梶と云った。野口本家は代々砲術師範の家柄で先々代は砲聲、先代は貳貫とか砲術に関する名が多い。

野は兄弟二人、弟を賤郎（幼名枝藏、渡辺家養子）、妹をみ津（磯田順二郎妻）と云った。幼い時より学問を好み藩中に聞え高かった。幽香の手記（先君物語）にはこの間の事情を次の様にしている。

学を好み幼少ノ時ヨリ其誉レ藩中ニ聞エタリ祖父ノ君ノ時ニ始メテ、家ヲタテシコトナレハ赤貧云ハン方ナシ、祖父ノ君、常ニ勉励其不足ヲ補ナヒ給ヒシト云フ、家世ニ砲術ヲナセドモ先君是レヲ好マズ、幼ヨリ只苦学怠ナカリキ、常ニ物語シ給フヤラ試験ニ出テハイツモ最上ナリシカハ其度毎ニ賞与ヲ欠カザリシト云フ、齡廿一歳ノ時父ヲ失ナヒ給フ

と記されている。野は二十二歳の時（文久二年九月四日）藩の儒学者秋元三郎兵衛次女くり（一八四五年（弘化二年）十一月二日生れ当時十九歳）と結婚した。

くりは五人兄弟の二番目で九歳にして父を失い、父の門弟である家老高須家に、十六歳まで我が家のように、のんびりと育てられ、性質が明るく楽天的で、おおらかな人柄であり、野とは反対の性質を多く持っていた。

野は学を好み、廉潔を重じた一克者であり、

領知書

元 現米拾貳石

一、家祿金六拾円九拾三錢九厘

内九斗 祿 税引

此金 四円五拾七錢

残金五拾六円三拾六錢九厘

右之通金祿ニ御改定之趣領知仕候依テ受証差上候也

明治九年八月廿七日 士族旧姫路藩 野口野

飾磨県権令 森岡昌純 殿

右の領知書によっても明かなように、微祿な五人扶持侍であり、くりの育った環境とは大きな違いであったが、日本の夜明けの序曲を聞き分けた、卓越した配慮による将来を見込んでの縁組であった。

当時の内外の情勢を幽香は（先君物語）手記に次のごとくしている。

先君ハ即姫路藩酒井公ノ命ヲ奉シ維新の際は外交官タリ、此勤タルヤ當時天下瓦解セントスルノ時ニシテ、人心既ニ人々枕ヲ高フシテ寝タル能ハサル位ナリキ、此命ニ当リ尽力シ給ヒキ、多クハ京都ノ地ニ任シ交際ノ間ニ他藩ノ事情ヲ探索セリ、其人々ハ谷千城、井田讓等ナリ、井田トハ殊ニ親シク後日姫路へ来ラレシ時ハ先君ヲ招カレタリ而シテ日夜如何ニシテ交際シ給セシト云フニ日夜飲酒放蕩ノ間ニ身ヲ置キ以テ歡心ヲ結ブ故ニ世人モ是レヲ評シテ、斯ルヨキ勤ハアラジト云ヒシトゾ、サレド其心中ハ果シテ如何ゾヤ、此頃ニ当リテハ先君ノ言一トシテ聞カザルナリ、心苦ノ間ニ愉快ヲ感シテ居給ヒシト、天下勝ニ瓦解シ徳川氏ノ京師ヲ攻ムルニ当リテヤ先君ハ京都ニ居給シト而シテ彼伏見ノ戦ノ如キハ恰モ、遊廓ニ遊ヒシ時、俄ニ砲声ヲ聞キテ驚キ給ヒシ位ナリシト、又或時姫路ヨリ京都へ至ラントスルト途次危キコト數回、姫路ハ幕府ノ方ナレハ途中ノ官軍ニサヘギラレ通過スル能ハサルヲ以テ京都ノ人ト称シ、言語ヲ改メ言フと記されており徳川譜代の親藩、姫路の下級武士の幕末情況の一面を物語っている。かような動乱の只中に、野・くりの間に新しい生命がやどったのであった。

幽香は一八六六年（慶応二年）二月一日、播磨国飾東郡姫路清水二九番屋敷で生れた。（現在の姫路城正面に向って左の堀に面した場所姫路市福祉会館の処である。）

野二十五歳、くり二十一歳であった。長男甲子太は早世し、幽香は二番目であった。

慶応三年、大政奉還の建白書とともに、王政復古を初めとし、藩籍奉還、兵制統一布告、廢藩置県等の改革は、封建制度の崩壊過程の中で、下級武士の中のある者は、時流に乗って新政府の官吏となった者、武士の商法とてなれぬ商売に手を出し産を失う者、或いは百姓姿に身をやつす者など、その多くは時代の激変に抗し切れず、悲惨な境遇に追込まれていった。

藩内情もようやく時代の波に打ち寄せられ、恭順論が大勢を占めて開城し、家祿奉還の後、多少薬品知識があったのを頼りに、「玉芙蓉」

①と称した無鉛白粉を取り寄せて売り、海岸より海藻をとってヨシムチンキの製造を初めたり、砲術の家に生れた野が化学的な知識を利用して、現世に処していったのであった。昨日まで士農工商の首位にあったものが、世襲の家祿を失ったのであるから、無理もない。幼な心に幽香は次のように述べている。

「腰の大小を外してから「玉芙蓉」と銘打った無鉛白粉を取り寄せて練塀の家で売っていました。町の人たちの買いにくるのが子供の私には恥しくて仕方のなかったことを覚えています。」②

維新におけるこれら下級武士は、経済的圧迫もさることながら、何かせねばならない危機感とあいまって、維新後の世の原動力となったのである。

こうした家庭的環境が大きく幽香に身についていったものと考えられる。

注① 現代婦人伝 神崎清編

35 P

② //

36 P

二 幼年時代・小学時代

一八七一年（明治四年）五歳になった幽香は姫路の総社（鎮守社神官の家）の寺小屋に通うようになったが、旧態依然たる読み書き珠算のみではという、学問に理解深い両親の配慮で、田島藍水の塾に通うようになった。田島藍水はクリスチャンであり、自分の娘を近代日本におけるキリスト教布教に先駆的役割を果たした沢山保羅と結婚させている。彼は日本組合基督教会初期の牧師で徹底的な教会自給論者で、渡米留学し学識も豊かでその敬虔なキリスト者らしい人柄は多くの人々に深い感化を与えた実践的伝導者である。この娘婿を持つ父親だけに、漢学及び欧米事情にも通じた姫路きっての進歩的塾であった。

ここで幽香は、原書で英語を習い漢学を習い初めた。その教材には、「智環啓蒙塾初歩」という英漢対訳で柳河春三①が香港英華書院から出されたものに訓点をつけたものであった（明治三年活版印刷）。また当時、父の野は葉売りの他に写本を内職としていたため、幽香は福沢諭吉の「世界国尽し」等時代の新知識に、父の写本を通じて接する機会に恵まれた。このように幽香は幼時より、新しい時代の息吹に接し、

内外の事情に視野を上げられるような環境に育てられたのである。

世の中が移り変わりあわただしく資本主義化への建設が始まり、混乱した世の中にあって、思想界に進路を示した福沢諭吉の諸説に、父は傾倒しその写本を多くした。

当時は教科書の画一化を排除しようという意図があり、教師も教育方法に創意工夫が出来、教科書も真剣に時代の息吹をすって選択出来た。幽香はこのまったく自由な進歩的小学校時代を送ったのである。

この幼くして植えられた自由思想は、其後大きく大きく芽ばえてゆくものになるのである。

姫路では明治六年一月より八つの小学校が開校され、七歳の幽香はその一つの侍屋敷の学校に通学したのであった。當時を幽香は次の様に述べている。

「畳の部屋で一日手習をしていましたが、別に離れのようなになった教場があり、黒板や椅子がちゃんと備へてありました。そこへ代る代る行って小学入門の「イト・イヌ・イカリ・キド・キノコ・キモリ」を習ったものでありました」②
此頃学校帰りに遊んだ歌が幽香の手記に見られる。

♪ 幼少のころうたったまり歌♪

「おまい女房はよい女房、顔ハ白カベ眼ハ水晶、眼元、口元しほらしく、朝はとうからおきなるて、かんす洗ふて、お茶たいて、四十四枚の戸明けて、隅から隅まではき出して、大かめ小かめの水かへて、ぢいさんばあさんおひんなれ／＼けさの茶の子ハ何ににげ、ぼたもち三つの山椒味噌よござんしょ／＼……」

このまり歌は幼い日の幽香の手まりつきをして遊んでいる面影を、眼前に髣髴とさせてくれるのである。

明治七年五月二十九日、父、野が生野銀山鉷山寮勤務となり、それに伴って幽香も生野口銀屋校に転校した。ここで幽香は鉷山に取付機械の技術指導に来ている外人に初めて出合い、その子供等と遊び外国人生活に好奇の目をそそぐのであった。ここで野口一家は、殊にムーセ一家と親交を結んだ。このフランス人ムーセというお雇外国人は、非常に親切であり、夫人は得意のお国自慢のフランス料理を初め、イチゴミ

ルクやチヨコレートなどを作って、幽香や弟の孫市それにシャル（幽香と同年の男子）マリイ（孫市と同年の女兒）等子供達に分け与えた。夫人は編物も幽香に教授したく思ったが、なんとも九歳ではそうたやすく記憶できるものでもなく、夫人は幽香の母くり編物を教へ、これが後に夫亡きあと、くりは姫路の小学校で編物を教へ生計に役立つことになるのである。

一年後、明治八年十一月九日、野は生野銀山寮を辞し、兵庫県学区取締を仰付かり、それと同時に幽香も再び姫路にもどつたのである。當時幽香は九歳であり、教員伝習所附属小学校に転校した。父が県視学であり方々の学校を視察しては取締を行つていた関係で、父の仕事の影響は、幽香に対する勉学への直接の刺激となつていた。役所勤務の父が持帰る百日草、天人菊、ペルシャ菊等、我が国に初めて伝わる美しい花の種をまいて、現われ出た嫩葉がすすくすくのび、美しい西洋の花を咲かせた時のよろこび、これ等が後に幽香の植物を愛する心、成長を樂しむ幼稚園の仕事に結びついて行く包芽になつていたのである。

この機は学制がしかれてまもなくのことだけに、小学校の名前の変わり方も激しかった。小学校は下等八級、上等八級に別れて居り、成績優秀なものは超級といつて、飛び越えて進級することが出来たのである。幽香はいつも上位優等に位して居り、その勉学の程を計ることが出来るのである。

明治十年九月より十一年十一月十三日までの（上等全級卒業試験まで）定期試験点数表によると、読書、習字、算術、暗記、幾何、作文、画法、記伝、の八科目に分かれて居り、定期試験点数表のことわり書がしてありその上に採点が書かれている。

各級毎科ノ点数ニ目次平均ノ点数ヲ加ヘテ之ヲ総点トシ、其総点十分ノ九以上ヲ得ルヲ優等トシ、定期目次ノ両試ニ於テ孰レモ総点二分ノ一以上ヲ得ル者ヲ及第、以下ヲ落第トス。

目次ノ点数二分ノ一以下ナルモ猶三分ノ一以上ニシテ本試ニ三分ノ二以上ノ点ヲ得ル者及本試ノ点数二分ノ一以下ナルモ猶三分ノ一以上ニシテ月試ニ三分ノ二以上ノ点数ヲ得タル者ハ共ニ之ヲ及第トス、然レドモ両試一科ノ点数五分ノ一ニナル者ハ共ニ之ヲ落第トス。但一科ノ点数五分ノ一二下ルモ猶無点ニ至ラスシテ定期点数ノ五分ノ四以上ヲ得ルモノハ之ヲ及第トス……「明治十年九月」

と右の様な規定がしかれており八科目の採点がなされている。これによつても判明するように学業成績には厳格な規定がもうけられ、計つた

ようにこの方式が守られていた。

幽香が習い修めた小学教育そのものが、日本の学制のしかれた最も素晴らしい光をともに受けた時期であったのである。まるでそれを裏書きするように、明治十二年中学に入ると、地方的にはより開けていた姫路中学でも女子に対する差別は強く、中央行政の教育方針が本来の自由な教育思想を徐々につめてゆくののである。

学校行政の変動がまったく激しい時期であり、学校名が変わることが多い、ここで整理すると左の通りである。

明治六年 七歳 姫路小学校入学

明治七年 八歳 生野口銀屋校転校

明治八年 九歳 姫路教員伝習所附属小学校転校

明治九年 十歳 飾磨県師範附属小学校に改名

明治九年 十歳 兵庫県姫路模範学校附属小学校に改名

明治十一年 十二歳 城東小学校に改名城東小学校卒業

以上のごとくである。

幽香は城東小学校（上等小学校）卒業に際して、その時の（十二歳八カ月）賞与に、「皇朝名家史論」を受けている。これでも解かるように、この頃になると明治文明開化に代り、教育政策が儒教思想を基本とした国粹主義が色濃く示され始めるのである。

三、中学時代

幽香は小学校を卒業した年、明治十一年十一月十三日、姫路中学に入学するのである。進歩的な父のすすめでもあり、父が中学に関係していたことも手伝って入学が許可されるのであるが、当時の教育界が女子の向上を、真向に取上げる方向に動いていた時でもあり、中学進学は意外に楽に出来たのである。しかし当時は文明開化とはいえ、一般の女子に対する蔑視の空気は、根深く残存して居り、儒学の教もさることながら、男子とは一切口をきかず、学校行事も伝達も届かず、勉強そのものより、まわりが全く勉強できる雰囲気ではなく浮き上ってしまい、

ついに一年足らずで中学を退学したのである。神崎清の編した現代婦人伝の「野口幽香」を見て同級生であった三上参次が次の様な手紙をよせている。

「御自伝拝読頗る当を得ました甚大なる奥越を覚え申候、皇朝名家史論の賞与など、尽きぬ近情の料宅候、クララ夫人は小生の大学予備門時代体操の時間のピアノ弾手として承知いたし居候、ただ中学時代の通せん坊之ことのお話にて候、小生もこの悪童の中のように御記憶かと存じ候が右ハ全然御誤解にて候、小生ハその時代ハ弱虫にて、さる可愛らしき悪戯ハなし得ざりし事にて候、下寺町、五軒邸の人々などその中にありしと覚え申候、昭和十四年五月二十六日 三上 参次

と当時を懐古した便りを寄せて居る。姫路中学でも左に示すように、男子に劣らず成績は上位優等である。

三等賞 目録 野口 ゆか

試験優等二付半紙一束賞与候事

明治十二年九月十七日 姫路中学校

中学退学後は、裁縫塾野尻芳春のもとに通い、一年半徹底的に仕込まれたのであった。

明治十四年～十五年に塾生が集って打かけの褌を姫路総社へ奉納したものが残っている。(鼠襦子の表、緋縮緬の裏二寸五分づき)ここで裁縫修業が東京女子高等師範学校に入ってから役立ち、裁縫はいつも抜群の成績であり常に百点である。この野尻芳春は姫路でも名高い賢婦人で好みのよさは格別であったと伝えられる。幽香も後年、教え子や親類のものが身につけるものに細かく目がゆきとどき、「この帯にこの着物は合わない」とか「良い」とかきびしく申し、良い組合せで行くと目を細めてその好みのよさを讃え、気持晴々としてむかえたとのことである。

明治十四年六月三十日、父、野が播磨国明石郡書記に任命され、明石に転勤となり、幽香も(十五歳)明石に移住し、女一通りの心得を身につけるために、花嫁修業が始まり、台所仕事から、一切の見習がなされ始めたのである。

しかし、幽香の心に湧き出した向学心は、つきることなく、着物を縫い合う間にも糸を紡ぎながらも、父のまわりにある借本に目を入れ

「米欧回覧実記」等を初め、常に広く海外に目を向けて読みあさり、わけでも、一八七二年（明治四年）末に岩倉具視大使一行の欧米視察に、日本最初の女子留学生として派遣された五人のことに引きつけられ、

「女子教育に関する御沙汰書」

女子の身を以テ海外修行の志誠ニ神妙ノ至りに被思召候ノ追々女学御取立候ヘバ成業帰朝ノ上ハ婦女ノ模範トモ相成候様、日夜心掛勉強致ス事

この事に幽香は「私も勉強してこの人たちのように洋行してみたい」④と、静まりかえっていた小さな池に大石が投げこまれたかのように、心がゆれうごき勉強をなんとかしたいと願うのであった。そして「東京に行つて勉強したい」「お茶の水に行きたい」との一念はついに、父、野が明治十五年四月十日兵庫県学務課専務を申附けられ、神戸下山手通六丁目番外二百番邸に移つてからであるが、野が「お茶の水」から赴任してきた先生の立派さに驚き、その話を帰宅して幽香に話したりして、これらの刺戟が重なつて、「お茶の水にやつて下さい」と父に願ひ出るのである。しかし進行中の縁談が親類の妨害でこわれるまで許しが出なかった。幽香にとっては人生の一節であるが、運よくついに明治十八年二月十六日両親の許しが得られその希望が入れられたのだ。幽香の前途に曙光がさしはじめたのである。

翌日から家の仕事は一切手つけず、入学試験の勉強にかかり、父の励ましと共に、県庁で受験し三人の内一人だけ合格し、神戸から汽船横浜丸に父と乗船した。時、明治十八年八月の末、幽香十八歳であった。

当時世の中は条約改正問題という大きな国策的意味もあって、政府要所の人々は、進んで、欧化主義を鼓吹、奨励し、西洋崇拜の風が国内に吹き、いわゆる鹿鳴館時代で世を挙げ、西洋文明に酔っていた時であった。当然女子教育の上でも大きな影響があったのである。

注① 幕末の洋学者で蘭学・漢学に通じた翻訳家

② 現代婦人伝 38 P

③ // 46 P

④ // 46 P

四 学生時代

幽香が学問の道に胸はずませ、父と乗船した時を同じくして、明治女学校が木村熊二により創立され、これよりも二カ月前、同年七月には「女学雑誌」が創刊され、女子学徒の多くの夢を育てる基となるのである。幽香の入学すべき東京女子師範学校も、同年八月、森有礼が東京師範学校の監督となり、東京師範学校女子部と改称され、男女両師範学校の合併を断行したのである。進歩的知識人として世に知られ、男女同権論を唱へ女子教育に熱意ある森有礼の英断である。この森有礼は、其後第一次伊藤内閣の初代文部大臣となったが、我が国教育制度の創始時代に多大な功績を残したのである。

東京師範学校女子部が、生徒に洋服を採用し、洋服を着て課業を受けることになり①学校に於てダンスを始めたのもこのころで、束髪も流し始め、いわゆる女権拡張論が徐々に起り始めた年であった。我が国の女子教育に改革の光が与えられ初めた年、明治十八年九月二日、幽香は東京師範学校の試験に上京したのである。その日の模様を幽香の同級生塚本はまが次の様に述べている。

「兵庫県からきたといふ野口お幽香さんは、見た所もずい分立派で、後に聞けば父上が学務課長をしておられ、お幽香さんは女でありながらここへ来る前に中学に入って英語を少し知っているという人でした。」②
とその日の幽香の様子を語っている。

在学中の明治十八年から明治二十三年までは欧化の風潮を背景として、森有礼の教育理念のすべてが表現された時期だけに、彼女等の受けた影響は、成長期の学生だけに大きく吸収していったのである。かような時機にいみじくも入学した幽香は初めてふれる舞踏会の模様をおどろき語っている。

「お茶の水の寄宿舎へ入寮した翌晩、同室の人に誘はれて講堂へ入ってみますと舞踏会が開かれているのに先づびっくりしました。宮内省の伶人がきてヴァイオリンをひいたりオルガンを鳴らしたりしています。師範の生徒は田舎者が多いのでただぼんやり見物しているだけです。が、附属の方には、良家の令嬢が多く男の先生と手を組んできかんに踊っていました。これは新時代の女性に正しい男女交際の道を教へるといふ意味の催しでしたが、欧化主義がこのときにはもう学校の正門から流れ込んできていたのです。」③

なお、在学中にも、教育方針、学課の内容、衣食住まで欧化して行き、寄宿舎の寢室はすべて寝台になり、それに前後して一人々々の八寸お膳が廃止となり、食堂は椅子テーブルに変わり、すべてが西洋化して行った。

寄宿舎は一室に四人づつ同居し、二十一室あり、生徒は全部寄宿に入ったので八十四人が全生徒であった。一級平均二十人前後であったので部屋部屋には各級の者が混っており、上級生が室長となり、当時の銀杏返しの頭を結び合ったり、自習室にて④勉強したり、大変家庭的な寄宿舎生活であった。

当時の教科内容を知るものとして、明治十九年より二十三年三月までの成績評点一覧表を見ると別表のようであり、立派な成績を諸科目すべてに納め、なかでも裁縫は、姫路できたえられていたせいか満点である。

成績評点一覧表

①自明治十九年二月 高等師範学校女子部第十四学年
至 十九年七月 後学期小学師範学科調査一覧表

修身	和文	作文	習字	算術	地理	歴史	図画	裁縫	礼儀	唱歌	体操	全科	欠席	臨時外	戒飾	禁足	旧席	姓	名	年令	年月	生国
九〇	七八	九〇	八九	八九	七七	八七	八七	一〇〇	七八	九三	七〇	八六	一九				三	野口ゆか	二〇	〇六	播磨	

②自明治十九年九月 高等師範学校女子部
至明治二十年三月 小学師範学科調査一覧表

倫理	漢文	和文	作文	英語	習字	数学	図画	博物	裁縫	礼節	唱歌	体操	全科	欠席	臨時外	戒飾	禁足	新席	姓	名	年令	年月	生国
七五	八九	九〇	八二	八六	九六	七九	一〇〇	八九	一〇〇	一〇〇	九二	八〇	八九	二二	一			二	野口ゆか	二一	〇二	播磨	

③自明治二十年九月 高等師範学校

至明治二十一年三月 女子師範学科調査一覧表

倫理	教育	国語	英語	数学	歴史	植物	物理	家事	図画	習字	音楽	体操	全科	欠席	臨時外	禁足	新席	姓	名	年令	年月	生国
九〇	八四	八二	八五	八五	九七	八九	八九	一〇〇	九〇	八〇	九一	八〇	八八	五			五	野口ゆか	二二	〇二	播磨	

と記してあり幽香の心いかばかりかその悲哀は計り知ることは出来ない。

この頃のことを級友塚本はまは次の様に語っている。

「入学して二年目の春のことだったろうかと思えます野口幽香さんが父上の訃に接し御郷里に帰られました。それから引き続き母上の御病気でまた暫く学校に出て来られなくなりましたので、私は野口さんのため、お講義の筆記を全部清書して送って上げました。」^⑤
幽香のどん底の悲しみの時、本当に心の支えになったのが、友達の愛だったのである。幽香の幼児教育への道を歩むようになった大きな原因も、寄宿で室長尾藤初子の影響によるものであり、この尾藤初子について、父、野は、明治十八年十二月二十五日、幽香宛の手紙に次の様に記している。

室長の尾藤氏は真に人柄よく何事も互に咄し合い、趣も之も僅ニお志しのみ、女兒弟殿他人中ニ修身兄弟の如く居る人ハ兼る不しなかりし、此人こそ真ニ其人ならん。何卒十分親切信実を以て交り、卒業後も、互ニ相談相手となる様御仕伺て被成、只、恨むらくハ来二月卒業すれば僅ニ三月之間のみにて、遠く別るるハ実ニ不情せめて一ケ年丈なりは同室せハと存候……

と記し、父の尾藤への信頼から、この人なればと、大きな感化を受けたのである。

尾藤初子が米国に幼児教育研究に私留学する折、幽香がその鹿島立にあたって送辞を述べている。

「貧富強弱ハ幼児教育の良否に依り、幼児教育の良否ハ慈母ノ薰陶如何ニ在ル物ナレハ苟クモ一片ノ愛国心アル者ハ女子教育ノ必要ナルヲ説カザルハ有ラズ君モ蓋シ夙ニ見ル所アリテ東京師範学校に入学し龜勉三年一日ノ如く、常ニ本邦女子教育ノ不完全ニシテ幼児教育振ハサルヲ歎キ、今茲二月二十七日ヲ以テ其業ヲ終ラント雖モ時機未タ熟セサルヲ以テ姑ク志ヲ曲ケテ仕ン鹿島へ封カント発程ノ期近キ在リ劣妹野口幽香謹テ是ニ臚シテ曰、妾夙ニ此校ニ志シ客年九月始メテ入校スルヲ、得タリ、然レドモ、奏人^{マア}越人ノ肥脊猶識ル能ハス況ンヤ其性質ヲヤ、強然独り君ノ志気非凡ナルヲ知り心ヲ愛慕ス君モ亦敢テ之ヲ棄テス忠告善導至ラサルナシ……

明治十九年三月

野口 ゆか

とあり、右資料より、初期女子留學生の意義と学姉を羨望を持って慕たう幽香の切々たる気持がくみとられるのである。なお尾藤初子は、後

軍人と結婚し、早死し、幽香が尾藤の目的を貫くことに計らずもなったのである。

相ついで両親を失ない不幸のどん底の孤独から、教会に誘ってくれ、神の愛を諄々と説く横井時雄門下に入り、神の僕として、明治二十二年五月本郷森川町講義所に於て、横井時雄不在のため、村井知至⑥に導かれ、空川なる人より受洗し⑦クリスチャンになったのも、級友塚本はま⑧のすすめによるものであり、これら皆、友人の影響によるものである。

幽香等の卒業年に、明治二十三年七月第一回総選挙が行なわれ、民主主義と云う言葉は使わなかったが、政治的にも、教育的にも、新しい人間の原理であるデモクラシーの実現に向つて進む形をとつていたのである。

男女平等が叫ばれ、男女交際が説かれる風潮をバックに高等師範女子部も全くの共学ではないにしても、同じ条件の教室であり、教授であり、男子と同学力が要求され、全く男女差のなき事を体験したその様子を、塚本はまは、次の様に述べている。

「在学五年の間に経験いたしました一つの、大きな段階は、男子の高等師範に合併されたことでした。……それにより私共の生活も勉強もぐんと、緊張して、レベルが上がったと思います。

……男女共学は各自の自覚に訴えてなすならば、いい結果を見ることは確かで、当然なさるべきことだと私は五十年前の経験から今もそう信じております。」④

と語っており、其後の彼女等の活動にも、自信をもって歩んだ要となっている。

また同級生内海乙女は当時を次の様に述べている。

「実に極端な人格無視主義で、僅かの成績の差によって、或は二年生といひ、或ハ一年生といひ、不幸にも小学師範科生として落される憂目に逢ふなど、全く試験成績一点張の画一法で篩にかけて撰り別け、尊ぶべき女性の一生をもめっちゃめっちゃにして省みなかった。当時を思ふとこれが現代であったなら私共もどんな反抗でもしたであろうに、唯々諸々として陰に涙を飲んで雌伏して居た意久地ない女であった事を今更情なく口惜しく思ふばかりである。併し其為に私共の組は、安井さんを始め二つの組の優等生の集りとしてなかなか幅をきかしたもので、卒業迄の三年間威張つて通したので、気位が高く自信の強い人が多かったと思ひます。」⑤

彼女等は一応に進取の気性にとみ、仕事に生涯を貫いたその力の自信になっていた。目まぐるしい学制変動期においても武士の娘としての精神構造が、指導者としての自覚と責任感をもたせ、それと共に男女共学のもとに育成され、卒業時には女子高等師範学校第一回生となった点が、進路を大きく幅広いものに進ませる要因となっていたのではなからうか。

① 桜陰会史

② 昭和十二年七月号婦人之友 女子教育黎明期——245 P

③ 現代婦人伝——50 P

④ 自習室Ⅱ当時の自習室は間口およそ三間にてその真中に二枚のひらきどある一間の入口あり、正面に幅三尺高さ七尺の窓ふたつあいだ一間ほどへだててならべり、窓には白くあやなき窓かけをかけ、二枚のガラスどのあげさげは滑車のしかけにて自由にす。室のひろさは、十五(畳で)ふしぎばかりにや、床は白茶色なるふとき織物のところどころに赤きすじつけたるをしけり」塚本はま作文草稿

⑤ 昭和十二年九月号婦人之友 女子教育黎明期——242 P

⑥ 村井知至(むらいともよし) キリスト教社会主義者で明治十四年に受洗し、同志社神学校に学び、明治二十年代本郷教会前身森川講義所において井時雄渡米中、副牧師格で幽香を導く、アメリカ留学中にユニテリアン主義を奉じ「社会主義」を著し(明治31年)キリスト教社会主義者として、活躍する。後東京外国語学校教授となる。

⑦ 東中野教会会員名簿

⑧ 塚本はま(旧姓小川はま) 幽香の女高師級友、慶応二年六月二十日生、明治二十三年三月女高師卒業と共に大阪師範学校女子部教諭兼舎監、二十六年三月迄梅花女学校講師(校長成瀬仁蔵) 婦人教育雑誌発行、明治二十六年八月塚本道遠(東大農学部卒業農学士)と結婚この仲介に幽香が当った。

明治二十六年五月〜三十年迄東京女学館教諭(虎の門)このころ初めて家事教科書執筆初める。夫塚本道遠に助けられ栄養書を入れた教科書を出版

明治二十八年長男玄門出生、明治三十年次男越夫出生

明治三十一年四月〜三十四年五月 女子高等師範学校付属女学校教諭

三十四年長女圭子出生、三十五年次女節子出生、三十六年三女光子出生

三十六年八月〜三十八年十二月 東京私立淑徳女学校教諭

三十七年三男憲甫出生

三十九年四月 静岡県立高等女学校教諭

塚本道遠朝鮮朱安塩田の創立につくすため次男以下五子と静岡に住む。

明治四十四年九月 私立青山女学院教諭教頭となる。

大正十二年三月 外に津田英学塾講師、家事教本上下二冊出版

東京女子大学創立に青山女学院代表としてつくす。文部省農商務省囑託として活躍、広幅織物、宣伝、生活改善事業、婦人平和協会、賛育会（木下正中会長）、水上生活者児童の教育事業、自由学園創立期の世話、友の会創立の世話など幅広い活動をとげ昭和十六年六月三十日歿す。

⑨ 安井てつ先生追想録 2―3頁

内海乙女（野村）——女子高等師範学校の同級生で福岡県福岡高等小学校訓導次いで明治二十六年母校の訓導となり、三十一年退職、さらに私立東京女学館、私立中村高女、私立跡見女学校の教師となる。教員三十三ヶ年勤務。
明治二十七年内海安太郎氏と結婚、二男（次男早世）一女あり。

二、壮年時代

一、幼児教育への道 お茶の水幼稚園

幽香にとって、女高師の卒業期は人生の一大試練の時であった。

相つぐ両親の他界の悲しみと、幽香生涯の美しい思い出となった村上直次郎（東洋史権威者で後東大教授となる）との恋愛であった。本郷森川町講義所に通うころ教会の中で知り合い、彼女はひたむきに彼を思ひ、彼もまた彼女に思いをかけた。まことに清らかな相思相愛の仲であった。

「今日試験ノ暗誦を仕ナガラ小石川白山下へ参り候処菖蒲ノ花余り綺麗ニ咲キ居り候へバ御覧ニ入レ候昨年ハ御一所ニ花見ニ参り候へ共、今年ハ遠方ニテ未ダ御出デナサラザル事ハ存候へバ、野村、佐々木、原、諸姉へ各一束宛差上候」

と村上直次郎が菖蒲の花片を一つ押花にして、その両面に、

「大空にさえわたりたり夜半の月

われもかくこそあらまほしけれ」

とその時の歌を作って書き記し、花の使いとして手紙を添書して幽香の元に送ったのである。この資料は、幽香が「他見許るさじ怨さん琴さん①
ん見てよい」と記している黎明という彼女の最も大切にされた手記の中にそっと、納められていたものであり、このことは、今まで誰れも知

り得なかったことである。このように心奥に秘められたロマンスも、彼の方が二つ年下と云うことで、「年上の女と結婚するのは親が許るしてくれない」との理由で家の反対が強く、恋愛から結婚と云う間際まで来たとき、ついに家の重みにこの恋は散ったのであったが、そのあまりにも清く美しい恋ゆえに、失恋の悲しみは深刻なものであった。

かような心理的動揺も手伝って、ひたすら信仰への道を強く求め、神の愛を求めて歩みつづける拍車となったのである。また子供の純真な世界にとびこんだという理由も、現世に対する失望が大きければ大きい程、子供にかけた未来に対する希望の火がもえたのである。見果てぬ夢にあこがれた清楚なロマンティズムが、汚れをしらぬ深山の、日本婦人では初めての山草会会員となり、高山植物の採集に夢中になった理でもある。幽香自身が清らかな一本の高山植物であったのである。

この失恋それ自体が彼女の全てのエネルギーになり生涯の美しい虹の綾を織なして行くのであった。

東京女子高等師範学校第一回卒業式は、明治二十年四月一日に挙行された。

「当日は花や羽根のついた黒い麦藁帽子を冠ったこと、野口幽香さんが卒業生総代で答辞を読んだこと」^③と書き記されているように、この晴れ姿を一目両親にみせたかったであろうと、幽香の心情に思いをはせると、胸がこみ上げてくる思いがあるのである。

なお学校の方でも卒業後の任地については女子の事でもあるので、なるべくその郷里の近く、或は親戚知人の在所の地方を各自に書き出させたりしたのである。

幽香は卒業に際し、自分の職種について次のように記している。

「志願 赴任地

第一、兵庫県

第二、東京

第三、西京

何地ニテモゼヒトモ幼稚園ニ従事シ得ル所ヲ望ム。

野口 ゆか

この願書の通り、幽香はその生涯を貫いて幼児教育の道を歩むことになるのである。

卒業と同時に幽香は母の里方にあずけた十歳になる妹静を手元に引き取り、神田区北神保町二番地森治ちか方に寄留していたが、下谷区西黒門町廿二番地に移り、卒業と同時に助教諭として母校女高師附属幼稚園に迎へられた。

「明治二十三年四月一日

判仕官 五等給下給俸」

そして俸給二十円にて勤務することになった。

なお明治二十三年十月十五日附で女子高等師範学校保母になり、正式に幽香の希望の道に入ったのである。

幽香は希望通り「お茶の水幼稚園」に残されたのであるから胸一杯の満足であったであろう。「遊ばせ方」「玩具の始末」「遊戯の材料」など女高師寮で同室の尾藤初子よりの教訓からめざめた幽香の幼児学校に関する記述が、明治二十年の日記に早くも見られるのである。その中でも、

「家庭ニ虚言多キ事

家庭ノ無主義

子供ヲ一個ノ人間トシテ取扱フ事」

等当時の幽香の思想が散見できるのである。

お茶の水幼稚園は我国でも最も古く、明治九年十一月に創立、創立期監事は関信三であり、彼の著す著書の中に（幼稚園記（明治九年七月））フレーベルの精神を説き保母松野クララもドイツで直接フレーベルから保育を教授せられた教え子であり、当時では我国で最も進んだ幼稚園であった。

開園当初は意気に燃えた幼児教育も、形式が整った反面、創立時の理想がだんだんと薄れて来た時期が、明治二十二～三年で幽香が入った

のはちょうど、その時期に当たったのであったが、夢と希望にあふれた幽香の気持には、寸分のすきもなく、毎日がたのしく、四年間が、一日のようにはりつめた日々で過ぎ去ったのであった。

「学習院幼稚園」

明治二十七年四月、ロンドンで日英通商条約改正交渉が開始され、六月には朝鮮出兵がなされて八月一日、我国はついに清国に宣戦布告を行ない、ここに、軍国主義に変転して行く一角をなしたのである。この四月、変り行く世の動静の中で、華族女学校に幼稚園が創設されることになり、その当時、女高師と華族女学校の兼任校長であった細川潤次郎の紹介で、女高師附属からも、助教授の資格でと云う事で、幽香が選ばれ、華族女学校附属幼稚園に移ったのである。

日清戦争が始まり騒然とした世の中で、内廷費の削減されることを聞いた幽香は、

「製艦費ノ為メ御内廷費御削減、明治三十二年三月迄毎年三十万円宛御下附可相成ニ付テハ本月ヨリ向フ同年月間私俸給拾分一献納仕度候此間乍些少御内廷費中へ御差加相成候様特別御聴許ノ程奉願候也。」

明治二十七年四月十三日

華族女学校助教

五等上級俸 野口 ゆか

宮内大臣子爵 土方 久元殿

それに対し、

「第二九七号

願之趣聴許ス

明治廿七年四月十六日

宮内大臣 土方 久元

華族女学校助教 野口 ゆか殿

と記してあり、少しでもお役に立ちたい幽香の主君に忠誠を尽す武士的気概が見られる。

幼稚園が新設されて間もなく、海外視察を終えて帰国した学監下田歌子が、幽香を呼び出し「華族女学校の教育は貴族的だという非難をうけて困るが、お前は平民の学校からやってきたのだから、その通り平民主義でやってもらいたい」との話があり、幽香は考えるのであった。貴族の子供をその品位を傷つけず、しかも平民的に教育すると云うことは、至難の業であった。

幽香と同じく華族女学校幼稚園に入った人に森島みねが居た。彼女は津田梅子の世話で、アメリカ西海岸でスラム街の幼稚園教育を勉強し、帰国後は麴町平河町で幼稚園を一年余り開いていたが、やめて華族女学校に移ってきた人で、明治二十五年に帰国後の津田梅子や渡辺政子等と麴町下二番町に共に住み、梅子の手元で生活していた。彼女の考えが全てアメリカ式であるのに対し、幽香は日本式であったがため、一つ話し合い、合議のゆく処置をとり、教育方式を熱心に語り合い、二人で良い考えを出し合い、合理的に且つ日本式にその教育方式を改めていった。

幽香の手記に幼稚園に関しての事が多く書かれているが、その数例を見ると、

「明治二十三年 日記

幼稚園設立ノ計画其費用ヲシラベル幼児五十人、備品、目録及費用一ヶ月ノ費用、東京二カ所ニ一ノ幼稚園ヲ建テントス、其費用デ予算セヨ、家屋ハ新築シ其ノ図ヲ作ル維持方法

十一月九日

発言ノヨカラサルモノハ其原因ヲシラベテ直シウルダケ直サントス

明治二十七年一月十一日 教育家懐中日誌

様と呼フ事ヲ禁ス

机ノ中ヲ時々掃除サス事

玩具ノ修繕

明治二十七年一月十二日

幼児性質研究方法

経歴簿ヲ作ル事

保育日誌ヲ作ル事

明治二十七年一月十九日

幼児衣服ノ事

附添衣服ノ事

化粧ノ事

車ノ事

明治二十七年一月三十一日 教育家懷中日記

話ノ材料トシテ外国人ノ風習人物ヲ其ノママニ用イルハ如何

北極ニ居ル熊ノ話

魯国ノ貴族ノ話

ワシントンノ少年時ノ話

毎水曜ニスベキ事、話ノ材料尋常小学修身一、二、ヲ修メリ之ヨリイソップ及原書ニカヘルベシ

明治二十七年十月三日

幼稚園ノ効用ヲ広ク世人ニ知ラシムニ先ツ其ノ方便トシテ父母ノ来園ヲ奨励シ親シク幼稚園ヲセシメ常ニ親シク話シ其災ニツキ真ニ幼稚園ノ価値ヲ知ラシムル事

附添人ニ禁ヲ結ビ話ナシ幼稚園ノ目的効用ヲヨク了解セシメル事

明治二十七年十二月一日

西洋と比較スル事

紹言ヲ輕スル事

徳言多キ事

活発ナ運動衣服ノ事

運動 朝ノ利用

体育ヲ主トスル事

日本の幼稚園ノ必要

明治二十七年十二月十一日

相馬二人 花ヲ採ル事

具高 返事

宮 礼ガ粗末ナル事

鷹司 顔ヲフク事

九条 化粧ノ事

衣服ノ事

明治二十七年十二月十三日

帽子掛ノ修繕

怪我ノ用意

体格検査ヲ一年ニ二回ニスル事

明治二十七年十二月十四日

鹿物語ニ付テ

動物ナドハ其習性ナドヲ多ク話シ

器物ナラバ其使用法ナド多ク云フ

例ヘバ鳩や鶏ノ水ノ飲ミ方 これなる事を話しに加えたし、其挙動鳴キ声等、児童の声ニ尤モ得た所を話したし

画キ方ヲ日本風ニ試ム事、兄弟ヲ一組ニ入レシ結果女兒ノ人ズレヌ様ニ注意スル事

附添の数、附添の管理方法

掛図ニ西洋通り用ヒルノ害

また積木寸法一吋角——一寸角へ

全国の幼稚園と連絡をする事

貧民幼稚園設立の必要」

と明治二十七年には日記に記るし幽香の幼稚園に関する考えを散見することが出来る。それから十七年たった明治四十四年の日記には幽香自身身の幼稚園教育への思想がかたまってきた事が散見される。

「明治四十四年 教育日記

幼稚園教育の目的

智、法、徳

徳の中心 誠実

社会・家庭 不誠実

思ヒ止マル止ムヲエサルニ至レリ

野口幽香の生涯

子守、留守、罪惡ト感ゼシムルニテ満足ス

無方針、無主義 習慣ヲ付ケルノカ良

社会の話

老人中心

貧民中心

独立、秩序、誠実

必ス見附カルモノ
ナラバ偽ラナイ

子供ノ観察

素直ニ育テル兒

諸種の道德を教へる

智識 直感ヲ先ンスルコト

直感セシムルニハ自然物ト子供ト密接ノ關係ニ於テ直感セシメサル可ラス、例、イバツテイル狐等ノ如

自然物ヲ愛シ人間ヲ愛スル愛

英国最盛ナリ Nature Study ヲ最初ノ科目トス

社交上ノ作法 情ヲ正シクシ、道德ノ基礎トナルコトヲスル

幼稚園ト学校トノ連絡

①問題——四十年來ノ問題

幼稚園ノ基礎ノ上ニ小学校ヲ置カサル可ラスト云、小学校側ニテハ予備的仕事ヲスレハヨイト云フ

子供ノ時期ヲ制ス

○母親——下ノ時期一歳迄

○部屋ニテ自ラ立ツ時期一歳—三歳

○幼稚園ノ時期

②媒介ノ階級

小学校—一歳以上三歳迄ノ託児場ト称ス(幼ヲ学校系統ノ中ニ入レ幼児期ニ一定ノコトヲスルト云フ)

小学校ニハ必ス幼ヲ併置スル事

等、日記に記載されて居り、華族の子弟の、着物の袖の長いのを筒袖に、(これは大名華族は一人の子供に六〜七人の附添がついてきて居り、着物の袖の長いのはお下りと云って少し着て、それらの附添に下るのであった。それ故長いしきたりで長袖をぶらぶらさせながら幼稚園に通って来て居り、かけっこをしても袖につまづいてころぶと云った非常に不活発なことで充分な教育もゆきわたらなかつた。なんだか筒袖に改めようとしたが附添達老女が頑張って幽香等の意見が通らず、その処置に困っていた。華族女学校の運動会に、幼稚園も加わることになり、それが人気の的となり、その場が華やかな社交場の話題となった。その運動会で駆けっこをさせたところ、長袖の子供は袖につまづきころび、筒袖の子供が一等賞になったのである。これには附添人達も何とも申し様がなく、語らずして翌日より一せいに筒袖に切り変って登校してきただのであった)と云うように、着任以来日が浅かったのであるが、改革を着々と押し進め、万事がお供、附添まかせの子供から、自分から進んで考え、行動する積極的な子供にと、日夜心を砕くのであった。

かような幽香の教育も、幼稚園にいる間は通じるのであるが、いったん帰宅すると、もう乳母お日傘式に幼育される華族様式に逆もどりでおんぶに、だっこが初まり、一貫した幼児教育が出来なかつた。幽香はそれをいたく口惜しい事と思ひ、

「附添人ノ心得 (明治三十三年)
教育家懐中日記」

保母ノ其心をはかる事

同情する事

手を出さぬ事

食事の心得

室内の心得 言語を正しくする事

起居動作を慎むべき事

喜怒哀楽をあらわにすべからず

又それを他に移しべからざる事

身体健全を保つ事

幼児に対して親切慈愛を以てす

幼児にして真ノ姿ヲ失フント云フ批評アリ

と記し、附添人の協力とその心得を話し聞いた事がみられる。

六〇七人も附添がついて来て居り、「お水」と云えば水係、「お菓子」と云えば菓子係と云うように、口で云えば自分で立たずともすぐ目の前に運ばれてくる次第、ころべさず起す、意味なくして泣いても附添が「悪うございました」では幽香がどんなに頑張ろうが、子供に芽ばえる個性的なもの、子供らしさは踏みじられるばかりだったのである。こうしてだんだんあまり考える事をしなくても何事も成って行ける風に、自分のすることは何でも良いと思って育っていったのであった。この幼児期における最も大切な時期にこんなことではと幽香は日夜悩むのであった。

「幼稚園には宗教が必要です。官立にはゆるされない。それで貧民幼稚園を建てたのですよ。斎藤さんはアメリカで勉強して来た人、私は日本の事さき知らない、三十五の年でした。もう四十三年にもなりますがね。フレーベルの母と子の遊戯、あれは自然物を自然を通してその奥にあるものを知らせる母の教育なのです。生れてからではおそい、生れる前の母の教育が大事なのです。」^⑦

と晩年語っているように、長い間、貴族主義におおわれて歩んできたこの華族女学校の経営方式は、新しい考えを持つ幽香の気持には満されず、森島と志を一つにして、道端の子供を集めて、フレーベルの理想に近く、幼児教育をやってみたいとの希望を推えがたく、信仰を中心とした子供を導く幼稚園をと、心が動くのであった。

注① 二葉保育園園長 徳永沢氏のこと

明治二十年十一月二十一日生れで明治四十一年府立第二高等女学校補習科を卒業してすぐ二葉幼稚園に勤務し、今日まで二葉保育園の大黒柱となつて貧しい子等のために一生を捧げ幽香の意志を見事に貫きこの大事業をなしとげた女性である。

昭和二十九年東京都の名譽都民に長年の功勞によつて選ばれた。

② 二葉保育園理事 藤井琴氏のこと

明治二十一年三月十七日生れ明治四十四年五月一日より二葉幼稚園に勤務した。その間大正九年三月、東京府の救済課に問題兒童の兒童保護委員を拝命し、大正十一年十二月二十八日にここを辭し大正十二年一月一日東京少年審判所に保護司として拝命された。これは我が国初めて設置されたもので女子は只一人であつた。ここで昭和十一年までこの保護司の仕事をつづけた。現在も委託されて活躍している。長年の功勞により昭和二十八年五月三日藍綬褒賞を賜つた。

③ 昭和十二年婦人之友九月号 245 P

④ 右に同じ

⑤ 松野礪(農商務省官吏)の林学研究のためドイツ留学の折結婚し来日し、東京女子師範学校で英語教師をしていた。旧姓クララ・チ・ノテルマンと云う。

⑥ 大岡愛子著 草庵物語 其六 昭和十八年九月二十六日

草庵物語は幽香の世話をして一緒に生活した大岡愛子が、幽香庵の日常生活の模様を細かく書き記した手記である。

⑦ 現代婦人伝 56 P

⑧ 津田梅子の世話でアメリカ西海岸にて貧民幼稚園の勉強をしたのち麴町平河町で一年ばかり私立幼稚園を開く、後幽香と華族女学校に勤務の傍二葉幼稚園(後の二葉保育園)を創設し、改姓して齋藤みねとなる。

二、二葉幼稚園設立

毎日、永田町の華族女学校幼稚園に通勤するかたわら、麴町六丁目あたりを通る折、貧民が、多く住っている場所があり、子供達が破れ着物で、路面に絵を書いたり、それを手で消して、その手で駄菓子を食べているのを眺め、片や日本の上流階級の子供と、これら、ただ貧民ゆえに路傍に放任されている子等の気持を察し、こよなく彼等が不憫に思われたのであつた。

これはなんとかせねばと、その思いはつのもつて、或日二人はいつも通っている番町教会で宣教師・ミス・デントンに話し、その協力を求め

たのであった。その思いは通じ、募金の為の慈善音楽会開催の運びになったのである。ミス・デントンはその生涯を日本の女子教育のために捧げた奇特なアメリカカ婦人であった。

「音楽会招待状」

謹啓今般多年幼稚園事業ニ経験を有せらる諸嬢日常の見聞に徹して深く慈善幼稚園の必要を感ぜられ、公務之余服貧児保育の指導者たらんと期せられ、既に慈善幼稚園の発起有之又在那須野原育児暁星園ハ従来百有余名の孤児を養育し来り同園の働ハ夙に世人の認むる所に御座候、且聞く所によれハ近頃猶一大拡張を試みられんとの計画有之候右ニ園の事業は実に今日の時勢に際し最急務なりしと確信致候ニ付、十分の同情を表し度き存念に候然るに近頃来朝せられたる有名なる音楽師ヤンカー氏並にケール氏、モリソン夫人等の諸氏熱心に右等の事業を賛成せられ同志の諸氏と共に、音楽会を開き、進んで自ら演奏せられんとの好意に付き、来十九日上野音楽学校に於て慈善音楽会を開き其純益金を以て該二園の事業を助け度き衷情に有之候就ては切符御廻し申上候に付御光来成し下され候はば、光榮の至りに奉存候 敬具

明治卅一年三月

発起人

伊藤 一隆

波多野 伝四郎

留岡 幸助

塚本 道遠

津田 仙

三好 退蔵

と右のような招待状が出され、明治三十一年三月十九日、土曜日午後一時上野公園音楽奏樂堂に於て取りおこなわれ、この音楽会はめったに人前でそのピアノを聞かせない、東大のケール博士の出演が人気を呼び、孤児院及びスラム街の子等の救済とあって、大成功を修めたのであった。

その純益金七百余円を二人の幼稚園と、育児暁星園とに二分されたのであった。

野口も森島も、華族女学校幼稚園をやめ、こちらの仕事に入ることは、諸般の事情が許さず、彼女等の手足となって働いて行ける同志を、探し求めることになり、日を費してやっと適任者を見つけることが出来、ついに、明治三十三年一月十日、専任保姆平野まち、森島、野口は隔日出園して監督し重大なる事務を取扱うとし、場所は麴町下六番町二七において開園されたのであった。

当日は児童は母親と共に来園し、君が代を唱い、「母親の心得」を野口より話し聞かせ、後一同に菓子を与えて児童のみ帰宅させ、そのあとで、讚美歌二百四十五番を唱い、綱島嘉吉牧師の祈禱式をもってその全てを終えた。

幽香等が情熱を傾中して記した「私立二葉幼稚園設立主意書」^①には、不幸の谷間にある貧兒らを悪の道に走らせる前に、「良い境遇を与え教育を施し、良き国民とするは我等同胞のなすべき義務」と語り、此の事業はただ単に保育を受くる者と、その両親だけの幸福ではなく、ひいては社会一般の程度を高め、罪惡を未然に防ぐ「予防の一オンスは治療の一ポンドに優る」ものであるとし、社会改善の上にも有効と記し、この運動に世の教育慈善家達の積極的な協力を求めることを記している。

社会の下層に沈潜する貧民、全くの恩恵に浴しない無教育の彼等の両親、生計の為に心を費し、帰る家といってもただ雨露をしのぐにすぎない程のもの、食物、衣服は云うに及ばずで涙あるもの、只見過すべきものではないと上流社会の子供とのあまりの違いに、心痛し眞の言葉を書いて述べている。こうして初めたものの、経済的援助の見込も全くの寄附であり、どこまでやれるか心配されたのであるが、

定期寄附 毎月金五拾錢（本園の經常費）

臨時寄附 定額なし 一部を基本金に積立一部を準備金に積立

物品寄附 玩具、絵画、紙類、衣類等

定期寄附者 五〇錢

（三十三年一月は五〇人）
（三十六年には九十九人）^②

特別定期寄附者（廿五錢以下） 十五人

があり、華族女学校をバックにまた二人の知人の人々の支援が集って、上流社会の大半の方々が同情を寄せ、やっと前途の見込もたち、幽香の当初よりの考えであった上流社会の人々をこうした慈善事業に結びつけて行くと云う希望も、ようやく実現の途にいたのであった。

開園当日の入園者は四名であったが、日ごとにふえて、十六名の定員はすぐに満員となった。その幼児の内訳は男十二名、女四名であり、父母の職業は左の通りである。

父の職業	母の内職
車夫	八人
大工	三人
指物師	一人
宮内省小使	二人
裁判所小使	一人
ローソクの真卷 ^{ママ} 一人	一人
	焼芋 一人
	煎豆 一人
	仕立物 三人
	髪結 二人
	巻烟草 九人

(店にても売り諸所に夜店を出す)

巻烟草の手間賃は百本仕上げ一錢五厘^③であり、普通上手な人は一日千二三百から五百位で、極上手な人で一日二千本しか巻けず、大変であった。母の手内職をしないものは居らず、みな共働きであった。

この貧民幼稚園のことは、おとぎ話しの、巖谷小波がいたく心に感じて、そのことを、少年雑誌に紹介したりして、世間で評判になり、人に知られるようになった。巖谷小波が書いた様子が第一回二葉幼稚園報告^④に出て来て居り、その記事によると、場所は酒屋の露路の一番奥で、八畳に六畳、二畳二間に、庭十二坪の平屋建てで、家賃は一ヶ月六円である。広い部屋を遊戯室として、他の部屋は食事、二畳は小使室とした。この家のもと壮士の人々の合宿したところで、大変乱暴に住み荒らされ、柱は傾き壁は落ち、見るからに荒れはてた家であったが、無心に遊ぶ子等の垢じみた胸掛や、つぎはぎだらけの筒袖の子供、その子等の背に羽根のはえた玉の様な神の使がおとづれて、ここだけは冷たい世風もとどかない、春風の暖かさが感じられる神の園であった。

保育時間は一日五時間で、課目は普通幼稚園と同じように、遊戯、唱歌、談話、手芸等あるが、兎に角野放しのいたずら坊主が多いのであるから、初日から規則にしばりつけず、手芸とか唱歌はあとまわしにして、遊戯を主とした方針がとられていた。この幼稚園ははじめから慈

善事業で月謝をとるのではなかったが、まるで無報酬では依頼心をおこさせるので御礼として一日一銭とし、もちろん欠席及休日は納めなくてもよかった。

専任保姆の平野まちと、子供達の間には初めは言葉も良く通じなかった。まったく彼等だけの言葉で貧民階級のみ通じあえる野卑な言葉だったものが、だんだんに先生を見習い、「あたい」「おいら」「てめエ」「おめエ」が「あなた」「何々さん」と云う様に変化し、また写真を写したが、子供等は自分の顔を見知らず「やあここにまあちゃんが居る」「やアこれがキイチヤンだ」と他人の顔はよく解かるが自分は教えられなければ、自分の顔を見知らないものであった。またお弁当の時間に先生が、「何が一番おいしいですか」と聞くと大ていはさけ、たらなど答えたが中に「牛肉がおいしい」と云う子供があり「牛肉はどんな物です」と云うと「かたくてかめませんけども私は一番牛肉が好きです」と答えたと云う。また家庭の状況を十分知ることが出来るものとして報告の中に次の様なことがある。

「幼稚園がおうちよりなせいいか」の質問に家に居ると朝から晩まで叱られてばかり居るけれど、幼稚園では叱られないから、こうしてお酒だのお味噌だの買いに行かないでもいいし、おもちゃは沢山あるから」「あなたの名は何と云いますか」と云うと、「この児まあてきさんてエの」「あなたの名は」「あたいねエ兼公てエの」

魚の絵を見せると何を見ても鮭、たらと云い、「此のお魚はどこに居ますか」「おさかなやさんの板の上に居るの」と云った具合であった。また或時「先生がきやがった」と云うので、先生が「きやがったはいけない」と云うと少し考えてから「先生がきやがりました」と云うように、なかなかのことでは改めるまで大変な苦勞であった。

なお園外運動として、貴族、友人の家などで、今で云う一日里親のようにして、自分達と違う世界も知る様にと心を配るのであった。また「家庭との連絡」を緊密にして、本園のように親をも助けようとするところでは、殊更その必要を感じ家庭訪問をして時を定めずたずね病児などいる時は、その手当など話し、親との交際を親密にし、子女教育の大切なこと、よく働き貯蓄の念を起せば、貧民街より脱して向上した生活が出来得ることなど、真心を持って語り、「幼稚園の主意」「親の心得」など平易に語り聞かせ、乳呑児をかかえなお手を引く母親達も、終いには幽香等と互にひざをのり出し、菓子などを与えると、拝みいただくようにして、一体となって悩みごとを話し出すのであった。そし

て幼稚園に対する親達の感謝の念は一層増していったのであった。なお「小学校との連絡」を、本園幼児で就学年令に達し入学する者は、授業料を減じ、生徒は本園監督の下に毎日通学するようにした。「病児の取扱」は此の仕事に賛同された赤坂病院院長「ホイトニー」、及回生病院医員木沢敏が自ら進んで病児の世話を望んでおり、幾人かの子供がこの恩恵に浴したのであった。

この幼稚園を二葉と名付けたのは、華族女学校長兼、女高師幼稚園長の細川潤次郎の「幼稚園保姆合唱歌」のなかから「二葉の撫子さかく園生」より選んだものであった。

かような貧民幼稚園教育のことが、だんだん社会的に知られるようになり、文部省留學生のちょうど人選中にその響きがとどき、明治三十年六月二十二日附で三通の書類が幽香のもとに届いたのであった。

「東京女子高等師範学校保姆 野口ゆか

教育学及幼稚園ニ関スル事項研究ノ為満三年間米国へ留学ヲ命ス

明治三十三年六月二十三日

文部大臣伯爵 樺山資紀

「外国留學生 野口ゆか

米国留學中一箇年金千八百円ノ割ヲ以テ學資ヲ給ス

明治三十三年六月二十二日

文部省

今般貴下外国留學生被相命候本省之都合有之来明治三十四年二月初旬ヲ以テ出発可相成筈ニ付右様御領知相成度此段及通牒候也

明治三十三年六月廿二日

文部省専門學務局長文學博士 上田万年

外国留學生 野口ゆか

幽香はこれら書類を手にして喜びにくれるのである。そして米国に行って悪くなくても困ると思ひ、持病の子宮筋腫の手術をさっそく行な

ったのであったが、これが残念にも失敗して、幽香は病院に長く入院する身となったのである。幽香にとっては二度とない外国留学の機会であったが、思いあきらめ、文部省の方も何度かその延長許可もあったが、辞したのである。

「外国留学生 野口ゆか

依願文部省外国留学生ヲ免ス

明治三十四年五月三十日

文部大臣 松田正久

この間二葉幼稚園の方はどんどん成長し、年をおいて次々と移転するのである。それは二葉が幹となり枝となり葉となり花と成って、伸びる様であった。

明治三十三年八月十七日夏休みあけ、土手三番町七番地に移転した。その日の園誌には次の様に記されている。

「小さき家狭キ部屋軒ハ傾ムキ垣ハ破レ、見ル影モナキ園ナリシモ、朝ニ夕ニ楽シク遊ビシ懐カシキノ家、見捨ルモ心苦シケレド何時迄小サキ所ニ安ズベキ枝ハ榮ヘ葉ハ茂ルベク今ヨリ広キ所場ニ移シ植エヌ」

と住み得る最後まで住んで移転する心境が見受けられる。その時の園児は四十六人で男二十四人、女二十二人になっていた。家賃は三十円である。

明治三十五年五月二十六日、下六番町四八に移転、園児三十七人、男十八人、女十九人

明治三十九年三月十日、四谷区元鮫ヶ橋六六に移転、園児百人、男四十七人、女五十三人であった。この四ツ谷鮫ヶ橋は、只今の国鉄四ツ谷のトンネルを出て右に見下す、信濃町と四ツ谷の間の一帯の低地で、今二葉保育園のある所（南元町）で只今では美しく整地され、そのおまかげもないが、幽香等が初めたころはこの辺り一帯が、東京の下谷万年町、芝新綱町とならんで、三大貧民窟の一つといわれたところで、裏通りに入ると、二畳、三畳の汚い部屋の中に五、六人の家族が折重なるようにしてくらし、陽の光も入らず、床下にたまった汚水が悪臭を放ち、住んでいる人は、いわゆる、こじき、くずひろい、の最下級の貧民で、このよごれた空気の中で育つ子供をみるたびに幽香は戦慄と共

に勇気が湧くのであった。四ツ谷に移ってからは全くのスラム街の子等だけに筆舌に尽しがたいほどまで、朝から「弁当弁当」と云って喜んでいるのであるが、いざあけてみると、煮物汁をかけただけのもの、魚の皮、牛の皮だけのもの、塩だけのもの、思わず胸がつまるのであった。また、彼等は二時半のおやつがまた一騒ぎ、おきつ、お菓子、お汁粉、沢山のパン屑を油で揚げたり牛乳で煮たりして、出すのであるが、家では食べたことのない素晴らしいものばかりで大喜びするのであった。

保育の時間は朝九時から夕方四時まで、働きに出る母親が七時ごろ預けにきて、夜おそく仕事の帰りに連れに來たりして二歳以下の乳児まで預るようになり、だんだんと託児所のような性格も帯びてくるのであった。全く無休の幼稚園である。小学校から帰った子供も、家では勉強をする所もないので、そのため図書室を開いて、自習時間を持たせ、少年少女クラブを設け、読書会を行ない、園を中心とした自治活動を行なったのである。

昼間工場に勤めて、家庭教育を受ける時のない少女達の切実な要求から夜間裁縫部も設けたのであった。

この（昔は甲武線）国鉄鉄橋北は宮内省御料地でその四四六坪を九ヶ年六ヶ月無料拝借することになり、移転できたのであった。また明治四十年七月には御料地拝借坪数八八四坪九勺となり、明治四十七年十二月迄、無料拝借の約束となり、幼児数百二十人、男七十人、女五十人となり、毎年増加していった。

明治四十年幽香の後を受けてたつ、二葉の大黒柱徳永恕が、保姆手伝として入園するのである。幽香は徳永を全面的に信頼し、表立つことを好まぬ謙遜な人物であるが、目に見えない力と智慧とに溢れた人であることを見抜き、共にこの二葉を積極的に、社会事業の面にも進めて行くのであった。明治四十三年徳永は主任となり二葉を背負うのである。

鮫ヶ橋に移ってからは、子等も一段と下級貧民となり、それはいかんとも仕方がなかったが、保姆の心からなる親切的指導により、だんだんと物わかりが良くなり、親達もびっくりする程であった。幽香は鮫ヶ橋に行くたびに、華族幼稚園の上流階級の子供に比し、貧街の放任の子等は、自分で自分を守るすべを心得て居り、遊びにしても少しの工夫でドブなどにころばぬようにしているのを、身のまわりの環境からの教えと、これを目のあたりにして、なんとか上流階級の子供も積極性を身につけさせるようにと、二葉での経験から、華族の子等に常々注意

するのであった。

この両階級の相違は、相方に学ぶべきことが数多くあり、幼児教育の仕事としても、幽香にとってはまたとない場であった。彼女は分けへだてなく同時に、この両階級の子等を愛したのであった。

二葉の発展はかつての幽香の理想を、裏づけるかのように、この貧しい子等にも光があたり、後、大正二年、明治天皇葬場殿の一部を戴き保育室四、その他積立金全部を費して増築し、定員二百五十名、保姆十人と拡大し、幽香は徳永恕と上田栄吉の三人連れだつて市内に散在する貧民部落や、吉原辺も視察し、狭いきたない町中にも、子供は天使のまなこを向けているのに接し、このような環境からなんとか救出しなければと、各所に保育所の必要を痛感するのであった。大正五年五十一歳になった幽香は、二葉幼稚園を保育内容の変遷にともない、二葉保育園と改め、新宿区旭町、二葉保育園分園を開設し、児童数百二十八人に増加し、大正八年には新宿分園に小学部を付設し、大正十一年には小学部は市にゆずり、徳永の創案で本園に母の家(母子寮)を併設し、十世帯を保護収容した。

不幸な多くの母親達が外へ出て働き、内職したりして子供を育て、一家団欒を楽しんでいる姿をみるにつけ、本当に良い事をしたと、述懐するのであった。そしてその様な母の家の中から子供を大学にまで通わせ、幸福な生活に入った人々をみるにつけ、なんとかせねばと、母の家希望者が続々とふえるのを見て考えるのであった。大正十二年九月に新宿分園が震災により類焼し、再開の見込なしとやむなく打切るつもりでいたが、焼出された人々から「先生いつまたお初めになるのですか」と迫られ大正十三年九月に再築した。学童部、五銭食堂、夜学給食と、本園に母の家増設三十三世帯となり大きくなる一方であった。

昭和六年徳永恕園長となり、十年三月二葉保育園が財団法人となり、深川区千田町に母の家本位の分園を設立、保育部付設と一緒に母達への授産も兼ねて、その附近の夜学生のための給食部を始め、以来三ヶ所にて保育、三百余名、母子六十五世帯、二百余名、給食一日平均三百食、その他隣保部、日曜学校、子供クラブ、夏季転住保育従事者実習養成、身上相談等、二葉の活躍はその枝葉をどこまでものばし、大地に力強く根を張り伸びて行くのである。かくて太平洋戦争に入りし、この年幽香は七十歳、全責任を徳永恕にまかせたのであった。

① 私立二葉幼稚園設立主意書

幼稚園の必要はこと新しく述ぶるまでなきことにして、既に我国に於ても、広く世に行はれ、家庭と相待つて、将来の教育を完全せしめんとするは真に悦ばしきことならずや、されども多くの幼稚園は主として中等以上の子女を保育すべき傾あり、飲食の世話は勿論何一つ欠くることなきに、尚幼稚園に通ひて、喜と樂の内に生育せらるゝに反し、社会の下層に沈淪せる貧に至りては、全くかゝる恩沢に浴すること能はず、加ふるに、彼等の両親は概して教育思想無く、かつ生計の為に心志を勞すること多く、愛する子女を顧るに暇あらざるが故に、彼等は幼稚の時代より街路に立ちて塵埃の内に寒風に打たれ、暑熱にさらされて、思ふまゝに悪戯を為すに至る。加ふるに樂しかるべき父母の傍に帰るも、そが家は、辛ふじて風雨を凌ぎ膝を容るゝに足るゝに足り、食物衣服またいふに忍びず、其の境遇は誘惑と悪しき実例とに満ざるが故に愈々其の不幸を増し、為に将来罪惡に陥り、社会の進歩と国家の秩序とを害するが如きことあるに至らしむるは、真に歎かはしき至にして、涙ある者の空しく看過すべきことならんや。されど彼等は不幸の境遇にあるを知らず、なほ無邪気に遊べることに至らしむるは、実に可憐にして惘然至極といはざるを得ず、嗚呼これらの幼児をして、未だ悪しき感化の侵潤せざる時代より、良き境遇に置き、教育を施し良き国民と為すことは、実に吾等同胞の義務といふも不可なかるべし、然かのみならず、此事業は、啻に保育を受くる者と其の父母との幸福のみならず、社会一般の程度を高め、罪惡を未然に防ぐを得べく、随いてかの養育院、感化院、出獄人保護等の慈善事業よりは、根元的にして「予防の一オンスは治療の一ポンドに優る」といへる諺の如く、社会改善の上に於て一層有効なるを見る。おのれ等多年中等以上の子女を保育し、其の経験により、益々貧兒の境遇を憫むの余り、彼等の為に特殊の幼稚園を起さんと欲し、微力をも顧みず計画する所あり既に世の教育家慈善家の賛助を得て、今年一月十日此の目的をもて貧民幼稚園を開き、名づけて二葉幼稚園といふ二葉をして生育せしめ愈々茂り榮えしめ、幾多の貧民が此の蔭に世の風雨を避けて、安らかに生ひたつを得しむるは、世の慈善家の助力に依らざるを得ず、依りて、此の主意を述べ切に世の賛助を仰ぐ。

明治三十三年二月

森島みね
野口ゆか

② 明治三十三年六月私立二葉幼稚園第一回報告

③ 右資料同じ

④ 右資料同じ

⑤ 二葉幼稚園園誌

⑥ 現代婦人伝 67 P

⑦ 上田栄吉は熱心なるクリスチャンで幽香の親戚になる秋元きよが嫁いだ人物で、バレリーナ谷桃子の父上である。

三、二葉独立教会設立

幽香は、二葉幼稚園と共に、この間、キリスト者としての求道の道をおこたらず一層に聖書研究に進むのである。

海老名弾正、綱島嘉吉、植村正久、プレマス、とその教えを経て、聖潔派に大正十年四月に登記するのであるが、ひたむきに神の教えを学ぶ態度はあくまでも純粹そのものであり、聖書における神の御言葉を深く理解するために、各派の巡礼をつづけたのであった。一句なりとも説教者の論じている意が理解されなかった折は、どこまでも追求して、正不正は明確にきびしく、不純なるものに一部の余地も残さぬ純粹さであった。

海老名弾正への転会の書簡によると、幽香は、信仰上の悩みをつづけている間に、ふと行った植村正久の一番町教会において、

「多年私の切望したりし点に接触致したる様に感じ爾来今日までそこへ来り居候成」

とし、初めてクリスチャンとして洗礼をうけた本郷教会の温情と愛とを深く感謝し、転会の申し入れを行なっている。

なお、此頃幽香は婦女子教育として、四人から五人の娘を預り、躰け教育をして居り、御木本幸吉の娘、峯（西川夫人）、容子（池田嘉吉夫人）あい（乙竹岩造夫人）土田綾子（山本忠興夫人、これは幽香が綾子側にたち、植村正久仲人で結婚す）青山むつ等も幽香のあづかり娘として、手元で躰けられ、野口家より、東京女子高等師範学校附属高等女学校に通学させ、側ら、英語は外人教師のもとに通わせ、その他諸処の先生の家に通い新時代にふさわしい教養をつけさせたのである。裁縫は自らきびしい教えをさづけ、親友安井哲の着物なども幽香が頼まれると、彼女等が、幽香のもとでしっかり縫いそろえて送るのであった。

なお彼女等は親が全てを娘時代の躰をかねて、幽香に依頼しているので、娘達の縁談話しにも、良い人物がいると見合せて、結ばせたり、親身に及ばぬ心からなる世話をしたのである。あずけられた娘達は、夏休みや冬休みの時は、幽香と一緒に房州や鎌倉に行ったり、山登りをして娘時代の楽しい思い出を作ったのである。そして一様に彼女等は、みな深い敬虔なクリスチャンとしての修養をつむのであった。

その家庭の様子はなごやかなものであり、安井哲が同居時代（三十五年頃）にも何人かの娘がいたがそのなごやかなしかも信仰をもとにしての生活は多くの人々の信頼をよせていた。

「いつになく安井が「けふは一つヒムをうたって」とそれから内村さんのかの世々の磐の英語を出して何遍でもうたえば、安井大喜びで「何といふ平和になったか」とそれから心限り二葉の家の返事ききに行けハ嬉しくもかしてやるとの事、急ぎ友の許、尋ねて事の由かたり

喜。

明治三十五年五月十二日

知人続木齊宛書簡に散見できる。

幽香は三十五年頃、この本郷教会で知った続木齊をもっとも身近に感じ、ほとんど毎日に近い手紙をもとによせている。

明治三十五年六月十四日の手紙に幽香は、

「私と云ったら非常にわるい所があって自分でも知って居って生涯それと戦ふて居る、そんならばどうしてそれをあなたにでも、ちゃんと現はしてとも思はぬ、そこが人間誰も知るまいが、私と神が知って居られる。いつかきつと底の底迄人前にさらけ出しても恥かしくない様になれると信じて進んでます。何事も感謝の外ありません」

と書いて居り、また、

明治三十五年六月十九日

……次に天然問題御説至極御尤、ただ天然以上に人を愛して居るといはるる点は御尤といふ能はず、私はしか感ぜず、併しもしも一人の人に対して天然以上愛をむけるといふ事は、出来て居るかも知れず、即ち私の唯一の愛のむけ処は私の妹の子供、それといっしょに居れば私は天然もいらず人もいらず……唯顔見せて居るだけで涙がこぼれる様にたしかにこれは天然以上に候、……私は私の貧民に対し世の罪人に対し俊子（此子供の名御記憶願ひ被たし）同様の愛が向けられて、始めて安心するもの、あえて白状致さん、私は俊坊の十分一も貧民を愛して居るとは思はず、巖本さんの話で私は深く恥たる事には、私は多分愛から出て、貧民の為に働くのでなくて、最低といふ隣みから出たもの、或ハ一番低いといふ社会の為といふ事も大原因となりしかもしれず、私を愛する人を愛するのは、当然の事よい事でも何でもなし、どうしても天然以上に貧民を愛さねば私は、安心出来ぬ様に感じ候、茲にむりに基督の愛の為に博く且、深かるかと今更の様に感じ申候、されど私の今此最愛の天然を捨て、貧民を愛するとはどうしても思はれず、それ在大々多情ならんが天然も貧民も同じ様に愛する様にも祈らん……

此愛を博く人間に向けて始めて高いのではないか、ああ私は天然や俊子に対する様に貧民を愛したい。貧民を愛する事が出来ぬなら、矢張人間はやめて、天然を愛する方が幸多く候、反応ある愛は感情的の人にはむしろ苦しく候、天然の冷然とただ黙する方が、結局幸福、苦しみも悲しみもなくてただ楽に候、それより人間を愛する方がたしかに、一番高けれど、或一つの理由により、天然を止めるとかう云ふのなら甘んじてあたりに止まり申すべし、或人が、

自花をこよなきものとおもひしは、子をもたぬさきの心なりけり

と申候、子もたぬ私、自花をこよなきものとおもふは、当然かも知れぬ、こんな事いふと何だか自分が可愛想になって来た、併し、其愛がなぜ貧民に与へられないのでしょうか、貧民と不幸な人は私の生涯の友なるに………

とあり、これらの手紙は当時の幽香自身の本質的なものがいかんなく表現されて居り、明治人の進歩的人間の人間の限界を知らされるのである。その意味においては、幽香は夢みはしたものの、初めは一つに徹したものでなく、貧民を観念的には「生涯の友」としているのであるが、自分とは次元の違うものとした考えがあったのである。

このような自分の心情を吐露して、人間としての罪深さを知り、いつか神の前、人の前に全てを、あらわに出しても恥かしくない人間にと、信仰により深く自分をひきたたせ、修養を行なっていたのであった。

一番町教会に移った後も、熱心にバイブル研究をおこない、多くの友人教え子を信仰に導いたりしたが、植村正久のもとをも、聖書解釈の違いにより離れ、巡礼の旅を続けたのである。植村のもとに寄せた書簡によると、

「先生が尚彼人達と行動を共にされずしてよからぬといふ宗派の上にお立ち、其真事が如何にも私には不思議にたへられぬ事、浅き私ながら、どうしても彼人々のいはる事が真理の如くきこえ、果して間違いなく真理、さらば先生とくにそれにお従いになる道理ならば、心はうやむやになり申候、私はブレズレンの人々の信仰に付て確なる間違といふ点を先生より今一度承り度き希望に候、それは私自身聖書をよむの少々学識もなければ、多年御薫陶を受けたる先生の御者を伺ふは最適なる方法と信じ、敬て候、愛深き富士見町のお仲間をはなる事、容易に私の思い得ざること、私の願ハ、彼方々の説かるる、聖書の説明などにつき、明かにそれ以上の真を示され度き事にて候、どうぞ明

日は聖書につき彼方々の説かるところ、おききとり上下度、可工のかの無花果の徳の解釈及、四十日の儀の相違の点などにつき彼方の説も誠に尤の事と相成候事上はおききとう上被尚今一応私へ其のことにつき御教示願はればありがたき事よと向上其内上り一度、御教示を願候上殊々彼方々の間点^{マヤ}につき少しでも多く承り度き希望に御届候、どうぞ無情御推察被下度願上候、序々山^{マヤ}じまだまだ沢山かきたて御ゆるし申上たし

一月十四日 記

幽 香

植村先生 御もとに

とあり、このようにたえず神の御言葉のままに、より純粹に従おうとするがため、幽香の巡礼は、全く苦しくきびしいものになるのであった。そしてついに二葉の小集合を始めるもとになるのである。

明治四十二年の秋から四十三年へかけ、二葉幼稚園の親の会に於て西条弥市郎の話しをきっかけに週一回六畳の部屋に集る事になった。明治四十三年四月に事情があり、西条がやめ彼と同じ明治学院学生渡辺善太がその後の、集会を引きついたのである。(四十三年四月下旬)これが後の二葉独立教会の元になったのである。その頃集会に集った人は、野口、徳永、渡辺鈴子、百島増千代、鈴木徳子、近藤澄、多々良貞子。園外から山本綾子、上領夫人、徳永まき、等であった。

この六畳間の集会は、二葉の二階に移転し、隔日曜日朝に変わり、これが大正元年十一月頃迄つづいた。その頃、中島やそ、鈴木歌子、齋藤峰などが加わっていた。十一月に渡辺善太の渡米により、後事は御牧碩太郎、野辺地天馬に託された。この間幽香は、自分の最愛の弟が病にたおれ、孫市への勇気づけの便りをほとんど毎日書き送っている。幼ない日々より両親なく、力付け合って生きて来た弟だけに、なによりも増して、普通の姉弟関係とは違った、なかば自分の半身のように愛していたのである。孫市は幽香の誇りでもあった。明治四年四月二十三日生れで、幽香と同じく、父野の職業に従い、生野、明石、神戸に転住してあるき、神戸一中より大阪大学分校第三高等学校を経て、東京帝国大学造家学科を卒業し、二十七年には逓信省に入り間もなく、大阪住友の技師となり、欧米を視察し、二十九年には貴族院議員で文相の久保田議長女良子と結婚し、三男三女をもうけ、大正四年三月工学博士の学位を受け、ますますその将来を期待されたのであった。

しかしついに功なく十月二十六日、此の世を去ったのであった。姫路名古屋の彼の墓石には、

「病床にありてよみける心思つくまゝ文字もそまゝて

秋風や、博士も墓の飾か那」

と幽香が胸を患らって病の床から悲しみをこめて、自筆で句が書きこまれている。

二葉の集會は大正七年一月二十九日、二葉独立教會と命名されたが、名前が附いたのみで別段変わったことはなかった。幽香五十三歳である。彼女がひたむきに求めつづけた聖書研究の集會は、心のやすらぎを求めつづける人々の間にこたまして、学習院關係の多くの婦人達が集うようになった。

当時の模様を元皇后女官伊地知幹子は次の様に述べている。

「当時（大正七年）教會に出入りする事、何となく周圍に気がなががあり、知人、親戚等にも知られたくない氣持の時とて、教會でなくてよい話が聞かれるといふ其事に引かれて、そちらへ伺ふといふ事御返事した」

とあり、また、

「大正八年春頃からと思ふが自分と同じように教會でなしに修養したいといふ、貴婦人方の為、筈町の宅に、野口先生、御牧先生を一回置きにおいでを願ひお話を伺う事にした。保科夫人、広幡夫人、織田夫人、二宮生子其他相當に多数の夫人がた、お集りになった。」

との書簡によるように幽香の始めた小集會が波紋となって、上流階級の貴婦人方が多くの關心をよせるのである。これが学習院出身の二葉修養婦人會となり、幽香がその専任に當るのである。

その話は彼女等の心の修養に大きな糧となり、幽香に対しては実に大きな信頼をよせているのである。

彼女のもとには、個人的な悩みを持って集まる方々が多く、幽香はその人々に一つ一つ丁寧に聞き共に悩み新しい道をさとするのであった。

徳川実枝子夫人その他多くの人々がおとずれている。乃木大将夫人静子が、柴てい姉の元に送った書簡と、歴史的な辞世の句をつけて、乃木大将を院長として尊敬した幽香に柴が送っている。乃木院長はこのほか幽香に信頼が厚かったことは周知のことである。これ等のことも幽

香に対する人々の多くの信頼を推察できる。

幽香は大正三年一月十九日渡辺善太に次のような便りをよせている。

「日本は今東北のきさんと、桜島の噴火と相撲とで大きすぎです。私は時々吉田先生の集りに行きます。きのふも海老名さんのですが、純福音の様本ですからよろしいわね、此方は武士的で一寸外に見渡りませんね。ぼろの着物を着て超然とすましていらっしゃるところが私すぎです。それで儒教仏教の奥義に達しきのふは日蓮との比較が出ました……。やっぱり私は武士的な人が好きなのでしょうよ。」と語って居り、明治期の典型的武士乃木院長への傾倒ぶりも計られるのである。

二葉保育園内では一ヶ月一回づつ知名の諸先生、賀川（豊彦）、山室（軍平）、渡辺（善太）、内村（鑑三）、本間（新平）、阿部、比屋根（安定）諸先生をおまねきして、お話しを聞き、園に働くもの、その他、一般の人々の心の修養としていったのである。

この間大正三年頃より幽香は自分を「老境に入った。無能だ」とか云うようになり、最愛の弟を失なった悲しみも手伝って大きな一つの壁に打ち当るのである。幽香は兼ねてより渡辺善太に渡米中より帰国まで、五六十通に及ぶ書簡を出して居り、学習院、二葉保育園、教会の仕事等、彼女の双肩にかかる重大な重荷を、「仕事のつかれ」と称して、老境に入った心境を語っている。

それに対し渡辺はアメリカのバークレーから次の様に答えている。

「老境に入った「無能」を感じたとの仰せ、それは何時かは人間の口から出なければならん言でしょう。然し此手紙で今更の様に驚かされました。然しあなたの御手紙の中にはさっぱりその新しき御経験に対する積極的なお心持が表れて居りません。「無能」を感じると云ふ事は、あなたの仰せられる様に悲しいことでしょうか、一体人間には其時代時代にならなければ、何うしてもこうしても味ふことの出来ない経験があるだろうと思います。真に「無能」を感じると云ふことは血氣の青年の時代には味い度くても味へないことじゃありませんか」：

（大正三年八月二日付）

なおまた、

「あなたは此頃「年をとった」と云ふことを口ぐせの様に仰るが、それは大変いけないと思います。あなたの此迄の御生涯では、充分主の

為に御尽なき事御出来にならなかつたので、若し学習院を御止めになれば、それこそ思ふ存分「苦める者」のために御働きが御出来なき
るではありませんか、そのためには、今日迄のあなたの経験と御交際とが、どの位助になるかわかりません。モーゼが愈よ八十歳で立つ
時武器として持ったのは何ですか？失望して無意味の羊飼をした当時の「杖」だったではありませんか（出四〇二以下廿・全七〇八―廿全
八〇五―一六全十四・十六・十七・五等）又ダビデがゴリアテを倒す時、用いたのは用いなれた「石ナゲ」ではありませんか、丁度あなた
の御生涯は今日迄シナイの近傍で無意味と思はふ、「義父の羊を飼って」御いでなすつたのでしょうか。愈よ此から自由な真実の仕事が出来
るではありませんか、今迄御用意なすつた「杖」を持って勇ましく立っていただき度いと思います。それを「年とつた、年とつた」と随
分けしからんことだと思えます。あなたの接触なすつた階級の「悩みの炎」はあなたに無自覚を与へる程強くないんですか、パウロの見た
「我敵を助けよ」と云ふ所は見へないんですか（徒十九〇・九）此自覚があなたの中に入って鉄骨となることを祈ります。パウロの心持を
充分に味わって下さい。」

（大正八年二月十九日）

とくずおれかかる幽香の氣持を勇気づけ、はげますのであった。

この頃幽香は学習院にも辞表を提出したりするのであるが、これは貞明皇后のたつての望みで「野口に澄宮までどうしてもみてもらいた
い」との厚い御信頼の御言葉で、末宮様までの幼児教育をお引受けし、延引されたのであった。貞明皇后の末宮でいらっしやる澄宮へのお心
くばりは大変なものであった。それは母としての最後の宮に託する御希望でもあった。

聡明なる幽香はそのお心をお察し申上げ、最後の御奉公のつもりで、力のある文を捧げておひきうけた。そのためか深愛のきびしい幼児
教育がなされ、幽香の幼児教育の絵仕上げの氣概も手伝って、小さな心に全てにわけへだてなく個性的な、主体性をもった教育がなされた。
それだけに幽香も澄宮の幼稚園入学当時の模様をそのまま綴った幽香の手記と、宮様の御絵とをいとも大切に、自分の一番重要な手文庫に納
めていたのである。このような一人の女子教育者の集大成である真心の厚い幼児教育を受けられた宮様だけに、その御成長振りは、三ツ子の
魂百までもと、只今の宮様の学者としての素晴らしい御活躍振り、そののびのびとして勇氣ある御生活振りにも納得できうるものがあるのであ
る。

学習院へ行らして、かけっこをして、宮様が途中でやめられようとした時、幽香は走り出て宮様に最後まで走ることを教えて、何事も、最後までやりきることを身を持って教えているのである。

皇孫殿下の御教育は、それまでは全て、殿中でなされていたのであるが、澄宮の時、初めて学習院幼稚園になられたので、一層の心くばりを致したようである。お成りの前に初めは幽香一人、数度参殿し、宮様に馴れて置き、後にお相手として有馬、小笠原をつれて参殿し、殿中でお相手達と馴れたし、お池の鯉にふをやることから、ドングリとり、茗荷採り、ボート遊び、これは宮様がよく遊んで居られるとみえ、すばやくお相手の来る場所を命ぜられ、御自分もさつとお乗りになり、かけ声をかけられたりお上手であった。その他、はめ板遊び、パラフィン細工遊び、かけっこ、ボールころがし、中もお相手方も一番おもしろかったものは、三輪車と自動車の競争、丁度雨降り初めは廊下でしたものを、なかなか承知が出来ず、とうとう、殿中の能台であろうが、車寄であろうが、どうにかおこまいなし、あちらへ曲り、こちらへ曲り夢中で時間がきたと知らせても興味はつきず、あまりにも広いお庭で一度や二度では道がわからないと思うと、お相手が直におぼえて、さつと先に飛んで行って御座所のお障子の影からワーツとび出してくるなど、面白いお遊びをなさって居り、宮様はお小さいころから何事にもまびんで、功者な御様子が推察されるのである。

このころ幽香の身边には、上流婦人をはじめ下層階級の裏長屋のおばさん達も、心の友にして、身边の苦しみを訴えにきていたのであるが、有島武郎との出会もちょうどこのころであった。

有島と幽香との出会は、そもそもは幽香の姪の田宮信子が神戸女学院時代の知人原智恵子(ピアニスト)の父原久米太郎が急性肺炎で亡くなり、悔みに行き、ちょうど来合せた有島に出会い、「安井さんの学校に行っているの」と話しがはずみ「これからはずっと世界が広がるから英語を勉強なさい」「ロングフェロー、テニス、ブラウニングなど素晴らしい」などと話し、近代的なはっきりした信子を、有島はいとも愛らしく思われ、其後しばしば交際するようになるのである。信子に有島は、「草のはな、かずはあれどもすす虫の、やどとなるちよう、つゆ草のはな」などうたって教えたり、「私の芝居も見て泣いたりしてはいけない、芸術として見られなくてはだめだ」など時折に話し聞かせたりして、より好意を持っていたことによるのである。そして大正九年十二月二十九日、二時から四時半まで、幽香は信子と一緒に有島宅を

おとづれて初めて語りあったのである。幽香はその模様を黎明という自分の思い出帳の中に、くわしく（事情を）しるしており、その時の有島の微妙な態度まで、ことこまかにしるし、話しの内容を記録している。その中でも、有島が土地開放の問題にふれて、

「親の財産を受けついだ金持ほどつまらぬものはない。自由に何も出来なくて、唯縛られている。その財産は自分で得た金でないのだから、直接人民に返してしまう方法も思っていた。」

と語り、「親の財産など受けなければよかったと思う」と語っている。

なお、有島はこの出会い以後、大正十二年六月六日の死の一カ月前まで幽香との交際はずづいていて、二年半の期間中、有島は、幽香の元に残した書簡十七通、いづれも身边のみじかなものばかりであるが、幽香に全幅の信頼をおいて語っている。大正十年一月四日の書簡など自分の作品「或る女」の問題にふれ、

「あなたは私の平凡振りから「或女」などが生れたのを、不思議なものやうに思はれたやうでしたが、お恥かしい話ですが、私には、或女以外にも毒血がまだまだ抜け切れませむ、私の傷口はまだまだ色々なものを吐き出すだろうと自分ながらいやな怖しい気もします。然し人生をありのままに実感せねばならぬやうに、生みつけられた一人の文学者にとっては、これこそ納めねばなら怒第一の貢です。人生を如実に見た上で、それに価値がなければ繻縫していた所が結局は無価値であらねばなら怒のですから……」

と有島の文学に対する考えを語って居り、あとの書簡も、有島のもとに來た女性の身边問題、就職等の紹介などを、幽香に依頼し、有島も幽香宅を数度おとづれ、親しく語り合い、つくり初めた幽香の俳句指導も行なっている。

『今朝は雨に夜があげました。雨中の池の気色もよろしいもので御座居ました。あの句ハ「木枯に埋みのこせし火桶かな」と致した方がよろしいかとおもひます。』

と細かい心遣いをかよわせている。なお有島は幽香庵をおとずれた際「雨十日 十日の後の青葉かな」と云う句を残している。（草庵物語其十四）

教会活動は大正九年十月に御牧師が辞任して、大正十年十月に由木康牧師を専任として与えられ、幽香は感謝にあふれて勇みたつのであ

った。大正十一年三月自分の後任に親友安井哲と二人で探した宇佐美敬を後進に立て、おしまれて二十八年間在職した学習院幼稚園園長の椅子を退職するのである。

そして賞勲局より大正十一年四月十一日付で幽香は従五位勲五等に叙せられ、宝冠章を授けられた。高等官三等である。

現在の天皇陛下、皇后陛下を初め、御幼少時代の日本の貴族階級及上流社会の子弟で、幽香の世話をうけなかった者は、ほとんどないのである。

個人としての信仰は許されても、学習院の中で、キリスト教の片鱗も口に出せないような、かたくなな学校の中で、二十八年間も無事に過ごせたことは、一つは、幼稚園と云う、学校教育前の課程を受け持っていたゆえに、軍国調の謳歌時代にも見過ごされ、あえて思想にからまれることなく、過ぎ去ったのである。そこには上流階級の子弟教育と云う大きな責務が幽香の心の支えになり、誇りとなっていたのであり、それが幾多の時代の荒波をも乗り越えて生きつづけられた要因でもある。キリスト教による深い信仰につちかわれた人格の光と、自由な深い教養の魅力によって、幽香は貴族社会のあいだに絶大な人間的信用を築き上げていたのであった。派手／＼しいことを嫌う幽香は、卒業生一同の謝恩会もことわったが、全員のたつての望みで開かれた催と、長年勤続の感謝の寄附金を「そのお金を二葉に使ってよいのなら」との条件つきでいたすような、何事も自分のことになると一歩譲って人を立てる所が各所にみられ、著名な婦人教育家や、社会事業家の多くが、権力のとりことなり、いつまでもその地位に、とどまって新旧争いの種子になっているのに比べると、後進に道を譲った幽香の決断は、まことに謙譲の美德の人であることが、うかがえるのである。

彼女の老後の生活を保証するものは、月額百円の恩給にすぎなかったのである。このうち教会に十分の一を献金しているのである。終戦後まで、この経済をなんとか保ったそば付の方々の苦労は、なみたいていではなかった。大正十年と十二年前後は、孤独についてしきりと悩み、なんとか頼れる人がいないか、本当に自分と一体に話し合える人はいないかと悩むのである。これは人間が全く神と一つになるまではどうしても、充される事の出来ない、人間的な孤独の淋しさである。さびしさもここまで精練され、純化されるならば尊いものである。そして幽香は、願くは、「キリストをそこまで理解したい」と必死に願うのである。キリストとマリア、親鸞と法然の美しい関係を至上のあこがれとし、

「前から自分はしばしばだだをこねたそれはたった一人でいいから本当の人に合せてくれといふ事であった。」（黎明）
と生涯をかけて、真の人「本当の人」に逢いたかったと述懐するのである。

それ故にいくつもの教会をその純粹さのために、巡礼し、最後に納得のゆく教会創設に立上ったのである。
このひたむきな情熱が、多くの人々に幽香の言葉が真をもって信じられた要なのである。

昭和に入り、より一層深く、信仰の道に入り上落合に教会敷地を購入し献堂式をあげたのである。その喜びは、はかりしれないものである。

「二葉が宗派に属したいといふ問題がおこった時、由木さんは日基、私はメソヂストだが実は宗派には属したくなかったし、もしも合同するといふ様な時が来れば、するといっていたのです。ところがその事が現実となったのです。それで今度は喜んで合同したのです。」

又一つ時を越して栗ひろい

幽 香

（昭和十八年九月十日草庵物語）

と右のようにのち桜山教会と合同し、東中野教会と昭和二十二年九月改名されたのである。

①乃木静子書簡

直二十九日ニハあらし致御地は如何に候御事と御伺申上候石林にてハなにもかわりなく少々山の木六七本程そんじ候、内々の事にて誠ニ仕合致候、水のなきにハ誠ニ困りいつ田うへができる事やつと毎日／＼水斗り気ニ致居候、扱今日まき十二束お内までの送り代も相渡候て気車便ニ御送り申上候また御便り下され度願上候此間申上候通り石林江二十三日迄ニ御成候得バ私事も石林にて御目にかかり二十四日には東京へ帰宅致候ニ付右様思召下され候
先ハ用事にて
あらあらかしこ

石林にて

静

子

六月二十一日

柴 姉上様

阿々子々満

てる子々満

封筒には「柴てい子様 無事急ぎ」とある。

出てまじして

出てまじして

ふ、私ニハまだそこ迄行かれぬと答へる。年始状ハ一年ニ一度楽しみぢやないかなといはれる。私ニハまだそこまでハ行けて居らぬ落合へ引込める、そこへ行かれる事を楽しみむなど答へる。庵が出来ましたら散策にせひお出をと申上げていつ頃出来るかなど語りつつ、玄關の外まで見送って下さる。大正九年十二月廿九日二時ニ上つて四時半までヨウカンとリンゴ、ミカン、暖かいものハといつてうどん玉子とじを、麴町においしいものはないなどいわれながら……又来よ、かまわぬからけふハこれでもかまうた方だなどいはれながら……」

この幽香の思ひ出帳より有島との対話、その雰囲気が洞察される。それから有島書簡の第一に続くのである。

第一、大正十年一月四日

野口幽香様

この間ハよ久こそおたづね下され又よ久こそゆっくり話してゐて下さいました。

あの日の小さな楽しい困憊は記憶に永く残るものだと思います。妹などにも常に顔はあはせながらあれ程ゆっくり語りあつた事はたんとありませむ。人は仕事の為ニ余りわづらハせられ過ぎて暮してゐるやうです。あなたは私の平凡振りから「或女」などの生れたのを不思議なものやうに思はれたやうですが、お恥しい話ですが私には或女以外にも毒血がまだ／＼抜け切れませむ、私の傷口はまだ／＼色々なものを吐き出すだらうと自分ながらいやな怖しい気がします。然し人生をありのままに実感せねばならぬやうに生みつけられた一人の文学者にとってはこれこそ納めねばなら怒第一の責です。人生を如実に見た上でそれに価値がなければ繻縫^{ヌイ}していた所が結局は無価値であらねばなら怒のですから、信子さんといふお嬢さんのみられたのも愉快でした。あのお子さんにはたしかに何か力強いものがひそんでゐる事を感じさせられます。その方の将来が最上の道によって導かれるやう祈つてゐます。

その方の御母上にも御序の節にはよろしく御伝へを願ひます。

長男と二人ぎりであのただだっ広い住居は淋しいものでありますが、又極めてしめやかな楽しいものでもあります。クオーレを十四五枚読んでやつてゐる中ニ今ハ寝二つきました。

正月四日夜 九時

有 島 武 郎

封書表書きは次の如く記されている。

市外千駄谷八九六

野口幽香様 御返事

注 「黎明」の文中や書簡の中に信子と云う人物が出て来るがこれは幽香の妹静（明治十一年姫路に生れ女高師附属高女卒明治三十年清田知本に嫁し昭和十三年歿）の次女であり、昭和二年東京女子大学卒業クローラ研究の田宮博（東大教授・理学博士）と音楽を通じて結ばれた。

なお大正十年七月八日の有島の最後の日記の中に「……夕方、清田信子来訪。静かに話す。結婚をしないという決心が Sentimentalism から来て居る様だと危険十分だからそこをよく理性に訴え考えて、十分の覚悟が出来た上の事にしたらよからうといつてやる食事頃帰る。今日は大層頭の短かい人のように見えた」とあり他の書簡にも多く信子に対して関心を寄せていることが察せられる。

第二、大正十年八月一日

こちらこそ外の御疎音を申し上げます。

いよいよ御幽楼も御で来上りになったさうでおよろこび申し上げます。目下ハ当地に滞在月の央ばから愛読者のまねきに応じて信州野尻湖の方に参りますので新秋ならでは東京には帰って参りませんがその上にては是非御邪魔にまかりできます。信子さんにもよろしく御伝へ下さい。此頃ハよい画が出来になりますか。時節柄折角御大事にお過しなされますやう祈り上げます。

八月一日

有 島 武 郎

第三、大正十年九月二十三日

野口幽香様

昨夜は推参一方ならざる御芳情を蒙りまして誠に難有く厚く御礼申し上げます。久しぶりで田園の興趣を味ひ心が涼しくされました。其夜は遠方まで嘸御迷惑で御座居ましたらう。お咽は別に御いたみにはなりませんでしたか。

どうか御妹御様信子様にもよろしく願ひます。御迷惑でなかつたら又寄せていただきたいとおもって居ります。

九月二十三日 夜

有 島 武 郎

今朝は雨に夜があげました。雨中の池の気色もよろしいもので御座居ました。

あの句ハ「木枯に埋みのこせし火桶かな」と致した方がよろしいかとおもひます。

(これは書き出しに、うす字で書かれているものであり、手紙を書き終ってから思いついて書き記したものであらう。)

この書簡は、幽香が書き記した「有島氏遺墨目録」の中に
二、短冊四枚、大正十年九月廿二日御来訪の節かいて頂いたもの、木枯のがここで出来ましたものとあり、庵で精一杯款待をされた有島の御礼状である。

第四、大正十年九月二十九日

野口幽香様

私の「死と其前後」が再び有楽座で明三十日と十月一日の午後五時半から上演されることになってゐます。若御覧下さりたい好奇心がおありになりますなら十月一日の分の切符が御座いますからさし上げます。この芝居なら信子さんが御覧になっても後悔をおさせ申すやうな事はないつもりです。若御出下さるやうでしたら土曜日に信子さんが学校から帰られる時一寸お立寄り下されば切符をお渡しします。その日はひよっとすると与謝野晶子女史も同席になられるかと存じます。

私の好きな雨も少しふり過ぎるやうで御座いますね。

九月廿九日 朝

有 島 武 郎

第五、大正十一年六月一日

野口幽香様

其後は又御無沙汰申し上げました。此手紙持参の長滝阿貴羅氏は初対面の方であります。私之或親友から紹介して来た方で小供を相手にするやうな仕事をして自活の道を講じたい希望を持って居られるさうです。若しや二葉園ニ氏を必要とする仕事でもありはしないかと思つて茲に御紹介申し上げます。御一考下されば仕合せに存じます。

後事讓相眉之節

六月一日 認

有 島 武 郎

封筒表紙

落合村 六六七

野口幽香様 長滝氏持参

とあり、幽香氏への就職依頼である。

第六、大正十一年八月五日

叔母上様

ゑび子様

三崎からの御葉書難有うございました。

愛子から承れば御両方には軽井沢におこしなされます由、私は十二日の午後二時廿分上野発の汽車で参ります。若御都合がよろしければ御同道致しませう。汽車は軽井沢に七時過ぎ八時近くに到着する筈です。

こちらでも一度御伺い致したいと存じますが何やら忙しいやうな気がしてゐますので御無沙汰、手紙で一吋貴意を伺ひます。

暑さを御大切に

八月五日 朝

有

この書簡では有島が幽香を、叔母上様と記している変化に気づく。ここに愛子と出てくるのは有島の妹、山本愛子で幽香と愛子は、句を通じての交際が深い。

第七、大正十一年八月十五日

青木さん氏を御紹介します。どこかあなたが御知合ひのよい家庭で使つて下さる人はいないでせうか。委細の事は後にお話申上げますが本人から大概の事情御聞取下さいお願いします。

八月十五日

有 島 武 郎

第八、大正十一年九月十六日

野口幽香の生涯

野口幽香様

昨日はあまり突然に而かも簡単に一人の婦人を御紹介したので御不審にも思はれた事かと存じます。実はかの婦人は、私が紹介状を書きました日突然訪ねて来た人で三時間程長い身の上話をして行つたのです。其婦人は其最近の配偶に私の知っている肺病の青年を持つてゐまして其人から私の事を聞いて尋ねて来たものです。話を聞いた上で私の受けた印象は其人が決して悪い人ではないといふことです。唯運命がその人に拙く、且つ意志に弱い所があつて他人の強制に乗ぜられ易く而かもそれに加へてあの婦人は男の肉感の方面をそるやうな素質を無意識的に其性質か肉体かに持つてゐるやうに観察されるのです。恐らくその最後のものが彼女を屢々誘惑と危険とに誘ひ込んだに相違ないと思はれます。夫れで彼女の事情を一応御聞き取り下さつて、貴女にも私同様様の御觀察をなさつたなら貴女の御存知の（若い男の居ない）質実な家庭にお世話下さる事は出来まいかと考へたのです。

因より貴女が十分に本性を御存知ない事及び其略歴を先方によくお話し下さつて万一の事があつても貴女の御迷惑にならぬやうなさつて下さる事が必要だと考へます。派出婦会に身を置かうと思ふのですが、従令其会はよくとも派出先きが悪ければ、又誘惑が待ち伏せしてゐる訳ですから私は極度に不賛成を称へたのです。私が周旋するといひのですがさういふ家庭も一寸思ひあたりませんし、ああいふ種類の女性に繁々接するのは私自身少し自信があり兼ねます。だから貴女に御助力が願ひたいのです。

既に御多繁の所をこんな御願ひをして相済みませんが彼女の爲めに御一考下されば彼女の将来に取つては此上ない幸福だと存じます。今日用事があつて國分寺まで参りましたが、お尋ねする時間を失しましたので、乍矢札御手紙を以而前文を補ひ併せてお願い申し上げます。

九月十六日夜 認

有 島 武 郎

信子さんから御問合せの聖歌音楽会之事、両三日中に御返事申すと御伝へ願ひます。

第九、大正十一年十二月二十九日

野口幽香様

久しくお目にかかる機会を得ませんが、御達者でお過しの事とおよろこび申し上げます。偕て度々御面識を願つてすみませんが、此手紙持参の武藤泰子氏は当地に於て何か適當之職を得たい希望を持つて居られるのですが、私には是れと申して目下よい思案が御座いませぬので御紹介申し上げます。事情は本人より御聞取上御一考下されば仕合せに存じます。

折角よい年をお迎へなさいますやうに、清田御一家にも御序の節何卒宜敷御伝声を願ひます。

十二月二十九日 認

有 島 武 郎

第十、大正十二年一月六日

野口幽香様

先日御遠路わざわざ御訪ね下さいまして、誠に難有う御座います。厚く御礼申し上げます。今日武藤氏より来状には益御申聞けの事業に専心する決心をしたといつて来ましたので私は固より賛成を表しておきました。

中途で倦まずにしっかりやうて貰ふ事を望んでいます。

信子さんの件については出過ぎた事を申したかと恐れてゐます。何分宜敷御取捨を願います。

世に珍らしい美しい心の持主なる此處女の行末よかれとは私も切に祈ります。最善の道が開かれるやう。日々寒い事で御座居ますが、あなたにも信子さんにもお褒りありますまいね、どうぞ御大事に。

正月六日 夜

有 島 武 郎

第十一、大正十二年一月十四日

野口幽香様

武藤氏からよろこんで手紙が来ました。おかげであの人も立場が出来かたといふものです。御厚情を私からも感謝致します。

山本で房子に聞くと信子さん数学が悪かったとてひどく悲観し由パスしたら悲観していたのが馬鹿々々しい事になるし、パスしなかった所が大した問題でもなき故、大に呑気にせられたき由、お伝へを願います。学校を重く見過ぎるのは悪い癖だと私が申してゐたと何卒。

一月十四日

有 島 武 郎

第十二、大正十二年四月十三日

野口幽香様

明日七時過ぎに中野に行かねばならぬ用事があって出かける序に五時半頃、貴庵に伺はせていただきましたと思います。序に御夕飯の御馳走にもあづかりたいと存じます。但し其日に御差支の節はどうか無御配慮其趣を女中の方に御申含めおきを願ひます。

其辺決して御配慮下さらぬ様呉々も御願ひ致します。

四月十三日 朝

有 島 武 郎

注(青線入りの巻紙に記されている)

第十三、大正十二年四月十五日

野口幽香様

昨日は御推参飛んでもなき御馳走を蒙りまして難お話しを致した時間は短う御座いましたが、うれしく、楽しい一夕を得ました事を重ね重ね御礼申し上げます。あれから中野之或会合に参り十一時半頃、家に巡りつきました。貴庵でもあれから楽しい団欒があつた事と思ひ口惜しくも存じました。其中御来遊を待ち上げます。御礼のしるしまで

四月十五日

有 島 武 郎

中村様、信子さんにもよろしく御伝え願ひ上げます。

端書、其一 大正十一年八月十四日

昨夜は失礼しました。今夕こちらまで来ました。中々よろしい所です。

夜の静かさ

八月十四日夜

有 島 生

軽井沢四六二 池田様方

野口幽香様

清田信子様

端書、其二 大正十一年九月二十一日

御手紙を恐れ入ります。御配慮御礼申し上げます。彼の女からは自分の住所を私も聞いていません。辻君といふのが一昨日わざわざ来てくれました。同君は指揮者を辞退した由、音楽会は前に欠点のあるものではないだろうとの事でしたが、信子殿には断念となれば申上げる必要もないと思いますが、序に一寸、

野口幽香様

端書、其三 大正十二年五月二日但馬城崎油筒屋

講演旅行を一先づ終へてここに来て二日ばかり書きものをしています。静かなよい所です。明日は又神戸に出でそこで一人演説をなさねばなりません。お二人とも御無事なりと察し上げます。万事帰京御拝眉の上申し上げます。祈 御健康

野口幽香様

端書、其四 大正十二年五月参日

野口幽香様

清田信子様

ここは信子さんには親しみ深い所と思います。原方に二晩厄介になり今日正午出帆榛名丸で帰途につきます。其前の暫らくの時間を須磨海岸に散策に用ひ、今は人丸神社門前の茶屋で此葉書をしたた免ています。

祈 御健康

注 野口幽香の弟、孫一（明治二年生れ、東京帝大造科学科を卒業、工学博士で大阪府立図書館等の設計者）が須磨海岸の住友別邸を設計し、須磨によく

野口一族が、行来していたのである。

以上有島書簡を年代順に紹介したが、有島が死の一箇月前まで、クリスチャン野口幽香との交りで、相互の尊敬の上に立った全幅の信頼を讀みとることが出来るのである。

四、句 作

句の道も昭和に入ってからこって、昭和九年頃にはその数は数千にも及び何回か雑誌に掲載されるようになるのである。その師は山口青邨であった。幽香の氣に入りの句を紹介する。

昭和三年

托鉢をゆづりて梅の手入れかな

幽香はこの句を作った時の気持を次のように述べている。

こうなるまでには随分苦労したのですよ後をゆずったといっ

て……生むまで育てた二葉ですもの一番気にかかるのは矢張

り二葉です。(大岡愛子著 草庵物語 其六 昭十八年九月

二十六日)

昭和九年一月号 夏草入選作

雨毎に色かはりゆく烏瓜

友禅をさらしてゐるや秋の川

昭和九年二月号

未枯や庭のかまへかたちほこる

未枯のいろさまざまの狭庭かな

うつ高き銀杏落葉の大師堂

三月号

うつろへる嘸さまざまや秋のゆく

未枯の烏瓜のみうつくしき

除夜の鐘うちつゝ日記つけにけり

四月号

桜餅、柳の枝と買ふて来ぬ

ストーブの部屋にはるしぬ十姉妹

五月号

福寿草咲きてしぼめり春寒し

ぞくぞくと雪割草のつぼみかな

六月

草餅や熊谷在の旧知より

七月

さまざまの袋とり出し種まけり

春雨や堇する香を待従といふ

九年八月号

睡蓮の葉に来て蜂は水をのむ

菖蒲湯に来上と又、使来たりけり

ほしものを入るしひまなし夕立かな

九月号

生垣のそちこちかるや夕涼し

五月雨のあふれんとするお濠かな

駒鳥のしきりに鳴くや朝曇

十月号

新しき寺の築地や夾竹桃

十一月号

二月作

三月作

四月作

五月作

六月作

七月作

八月作

一月作

十二月作

十一月作

十月作

十月作

筑さけて簪を買い来ぬ避暑の宿

七月号

四月作

奥多摩吟行

春雨にふるき手紙の始末哉

青田中家ほととの岩簗え立つ

しばられて山吹咲ける垣根かな

十二月

九月作

牡丹見て木の芽田楽いたゞきぬ

御筆を列へて今日の乃木忌かな

八月号

五月作

昭和十年一月号

十月作

夕厨汐干帰りのみやげかな

秋晴や柿をもらひに客多し

ゆく春の京の竹の子食うべけり

二月号

十一月作

春愁や友の命はつづくなり

うるさしと思ひしつるの紅葉せり

九月号

六月作

天平の蠟纈染の屏風哉

麦秋や松から松へ尾長くる

三月号

十二月作

十月号

七月作

冬さわのただ一輪のばらさびし

羅の金銀の筋うつくしき

四月号

一月作

昔の母校訪ねて

古稀自祝

あれはてし花壇ニ低く花と蝶

一人来て峠ニ立つや梅かをる

十一月号

八月作

五月号

二月作

夏館小川の流れゆたかなる

姪達のくれし春着や古稀祝

十二月号

九月作

六月号

三月作

朝霧やまだ咲きさらす紅蜀葵

お彼岸ニ大雪降りて椿落つ

黄蝶のきのふもけふも萩に来る

萩の根を約せし人ハ誰やらん

昭和十一年一月号

十月作

唯一人縁に坐りぬ十三夜

篋の切れ目に秋の秩父見ゆ

二月号

大原女と共に電車や秋時雨

香の香にふとたゞづめり奈良の秋

三月号

年賀状局に送りし炬燵かな

古稀に際し皇后陛下より御下賜品ありしかば

みめくみにたゞつつまれて日向ぼこ

四月号

郵便も今日ハ来ぬらし深雪宿

狸汗銀座の裏の二階哉

村毎にどんだの用意みゆるかな

五月号

雪深し牡丹の軸の赤きかな

六月号

かしましく彼岸詣の通りけり

旧友を訪ふや紅梅咲きこぼれ

七月号

あちらむきこちらむきなる椿かな

芝公園

お雪屋をめぐりてかへる夕さくら

八月号

草庵のあした夕へや春はゆく

一本の葉桜庭を覆ひけり

とりどりにかきなかしける扇かな

九月号

柿の花落ちて縁にも二つみつ

十月号

もらひたる扇の朱竹おもしろき

ところどころ沼もあるなり梅雨の原

何もかも井戸に冷して主婦安し

十一月号

濃紫草津みやげの桔梗哉

霧深し窓より窓へ通り行く

昭和十二年一月号

柄をふいて大事に仕まふ秋団扇

高原の花生けてあり蝶来る

二月号

大師詣手にく野菊つみもてる

五月作

六月作

七月作

八月旬

九月旬

十月旬

足袋ぬいて芋掘りに立ちいてにけり

三月号

十二月句

銀屏の乃木大将の書簡哉

四月号

十二年一月句

芭蕉の句色紙散らしの蒲団哉

もらひたる餅に事たる庵の春

五月号

二月句

黄梅の枝長くして花列ぶ

六月号

三月句

芍薬の芽のくれないに人居らす

七月号

四月句

風冷し山吹の池波たてる

八月号

五月句

仔雀は若葉にかくれ声のみす

冬物の入れ替もせず梅雨来る

参内

○枯蓮や大内山の陽は入りぬ

○献上の柿は武蔵野のつゆのまゝ

○禁園にはるかに萩の花みゆる

○入側に秋の夕日に照りわたる

○避雷針秋日をうけて金色に

○おほみ心なごめまつらふ真盛りの

駒つなぎの花はうすくれないに

○禁庭のつゆにぬれたる駒つなぎおほけ

なけれどわが床の上に

○瓶ながら夜はぬれ縁出しつつ

かはゆき花を懇ろに、吾れの駒つなぎ

枝垂るゝ下に蔭膳を子にすかるるなり

つゝがなくいよ

○こまつなぎ、つなぎとめたる庵かな

○小春日やみ知らぬ小鳥そちこちと

○禁庭の紅葉は深く経まよふ

○大和絵の紅葉の中を歩むかな

○蓼紅葉ふみわけ上る寒香亭

○夢なるかうつゝなるかや草もみぢ

禁園にたゞ黙しけり草もみぢ

陽は入りぬ離宮の前の冬木立

お月見

十五夜の句会の用意何やかと

白萩にすぎ去りにけり月今宵

月の庭芒ばかりの無なりけり

もちよりの馳走いらける良夜哉

月をまち柿とどはせとまてるかな

博物館にて

部屋寒し四十八体飛鳥仏

秋晴や普賢菩薩の像白し

天平の子の日遊ひや手辛鋤

鎮鉄の音色やいかに奈良の秋

その他

板塀は古く夾竹桃の花新た

夏座ぶとん五色の木綿さばさばと

夏帯もせまく短く老安く

団扇には笑而不訾とうき記す

歌麿を自慢に虫干の客迎ふ

唐辛子背をそろへて赤く青く

烏瓜道行く人に所望さる

冬かまへ雪と鳥とを友として

空襲に去年今年なきこたつかな

水やれどく育たぬ薄紅梅

旅仕度新たにたゝん初詣

新しき水仙列ふ花屋かな

枯野原径はいつにかありにけり

蓮月をかけかへ飯の宿し春

日向ぼこ何もなか里し日の如く

路のたち見いてたりとの便りかな

ゑりあかのつきたるまゝに年くるゝ

食卓もこたつの上の佗住居

火鉢には平等院の瓦釘

紅梅にいかれむつしと語りけり

紅梅の花おほく思いはてもなし

わが垣根草つむ人のありにけり

独り居の縁に座りて春惜しむ

行春や形見の小袖ときにけり

山吹の八重に一重にかはりけり

流れ来るつけ梅うりの声を追ふ

七夕や子等のねぎごとさまさまに

風鈴も新羅古鐘の音色とや

軒近くひぐらしの来てはるしやむ

朝顔を打つ音かるし草の宿

雨はれて萩のもつれをとさあるく

柿の竿少しとゞかず打ち仰く
何もかもよか里しといへ秋淋し
われやむと人になつてそ年の暮
風邪の床紅葉に対しとらせけり
埋火に煉香ひつとしのばせつ
つゝましく砂利にうづもれ福寿草
年のくれ一人留守居に事多し
みゆるしをたゞこれ願ふ年のくれ
旅なかし又も紅梅咲きにけり
客去りしあとにかりねのこたつかな
銭湯のかへり立ちよる梅の寺
椿折り人のけはいやわが垣根
風にゆるし椿の枝のほそほそと
花茶漬京都みやげの朝便り
烟突の烟たくまし白牡丹
子を負ふてせんも早めこ母若し
里谷には老のめかねと蠅たゞき
やはらかきあらひさらしの浴衣哉
青すすき門より高く入りかたし
老ぬれは昼寝もひとつ仕事哉

茂みよりうき上り咲くからすうり
悠揚と百合をめぐけて黒揚羽
寺入りをしみしみかたる夜長哉
きり雨の行人坂のけはしさよ
又ひとつ峠を越して栗ひらふ
冬こもりともかく本を二三冊
春雨に子等とひいるをつくりけり
春風や藍の香たゞよふ染工場
病み給ふ師を訪ふ電車麦の秋
隠棲の師を訪ふ小途みやこ草
七夕や子等のねぎごとかゝげあり
信濃なる土用蛭や山の宿
駒力嶽雪あざやかに見ゆるかな
雲動き山又山ニかげ涼し
法隆寺にて
小春日や、推古の昔さながらに
いねかるや奈良天平をよそにして
黄蘗にて
松ふりて秋風寒し黄蘗山

秋雨の音なき奈良の宿りかな

七沢行

寒牡丹けさ開きたり誕生日

上の句に四肢はつらつとかるた哉
何となく日さし春めくあしたかな

以上、数千の句の中より幽香が気に入りの句で晩年に何回もしたものでより選句したのであるが、幽香の時折りの飾りけのない素直な気がにじみ出ている。

昭和十年幽香七十歳二葉保育園が財団法人となり深川分園が出来たのを機会に一切を徳永恕に譲り、其後は趣味の道に生き、美術工芸に興味を持ち高等官であった幽香は親しく正倉院御物に接し、その御物の応用から、自から創案した蒔絵染の屏風を初め各種の手芸品を編出し、手芸の会が作られ、学習院出身の人々の発起で秋にバザーが催され、二葉の大きな財源の一つとなっているのである。

幽香の頭からはしげばしげるだけ智慧の種が、あふれ出し、二葉の泉となっていたのである。

(次号に続く)